

フロイト主義を超えて

大谷明史
統一思想研究院副院長

I 性解放理論の台頭

1. 序

19世紀に、西洋社会において、神を否定する強力な無神論、唯物論思想が生まれ、あつという間に、茨のように全世界を覆っていった。1859年はその象徴的な年であった。すなわちカール・マルクスが『経済学批判』を著し、唯物弁証法に基づいて唯物史観の公式を提示すると同時に、後に『資本論』として体系化されるマルクス主義経済学の骨子を発表したのである。マルクス主義は神の存在を根底から否定するものであった。その同じ年に、チャールズ・ダーウィンが『種の起源』を著し、キリスト教の創造論を否定し、生物および人間は弱肉強食の生存競争を通じて進化したものであると主張した。

そして彼らから少し遅れて19世紀末にジークムント・フロイトが登場した。フロイトは、人間の心を根底から揺り動かしているものは、リビドーという性のエネルギーであるといい、人間の霊性を否定する本能的な人間観を提示した。それは生理学的唯物論というべきものであった。

中世から18世紀に至るまで、西洋社会において、キリスト教は絶対的な指導的精神であり、人々は無条件に神とキリストを信じ、教会の教えを柔順に受け入れていた。14世紀から16世紀に台頭したルネサンスは、中世の束縛から人間精神を解放しようという運動であったが、人々の神への信仰は揺るぎないままであった。18世紀の啓蒙思想において、無神論と唯物論が展開されたが、それはキリスト教精神を揺るがすまでには至らなかった。しかし、19世紀の無神論・唯物論はキリスト教精神を根底から揺るがすものであり、西洋社会のみならず、全世界を覆いつくす勢いで広がっていったのである。

カール・マルクスによって築かれた暴力革命の共産主義思想は、20世紀に至り、レーニンの指導するボルシェビキ革命として実を結び、地上に始めての共産主義国家ソ連が誕生した。ソ連は宗教の根絶を公然と宣言する悪の帝国であった。そして歴史上、最大の独裁者であるスターリンのもとで、ソ連帝国は世界共産化を目指し、全世界を震撼とさせていった。そして第二次世界大戦の終了とともに、共産主義は東ヨーロッパとアジアに広がり、まさに世界を飲みつくそうとする勢いになった。

かくして20世紀を通じて、世界赤化を目指す共産主義諸国と、共産主義の攻勢を防ぎながら、神の下での理想世界を目指す民主主義諸国との間に、熾烈な冷戦が展開されたのであった。しかし、20世紀末に至り、共産主義世界の中核であった悪の帝国ソ連は崩壊した。

今日、共産主義の輝きは色あせたが、その闘争的な唯物論思想は、様々な形に姿を変えながら、根強く生き続けている。また共産主義思想のよきパートナーであった進化論は相変わらず世界中で科学的真理として受け入れられている。そして進化論は神を否定する唯物思想の温床となっており、今なお生き続けている共産主義思想を支えているのである。さらに、キリスト教の性倫理を否定するフロイト主義は、やがて左派の性解放理論となって、マルクス主義、ダーウィニズムと共に、今日の世界的な倫理、道徳の崩壊現象に大きく寄与しているのである。

それではなぜ19世紀に、世界的に影響を及ぼす無神論・唯物論が生まれたのであろうか。それは神の摂理から見ると、20世紀が終末の時代であったからである。すなわち、20世紀を超えて、21世紀から新しい時代——新しい天と地——が始まるのであり、そのことを知っていた、この世の神であるサタン(悪魔)が、永遠に世界を支配し続けたいという野望のもとに、神の摂理を妨害するために、あらかじめ19世紀に世界的に茨の種をまき、世界を覆いつくすようにせしめたのであった。すなわち、マルクス、ダーウィン、フロイトの背後から、彼らを操って、彼らが強力な無神論と唯物論を構築するように導いたのである。

かくして20世紀は神を否定する精神が世界を覆う世紀となった。しかし、一方で暗い力を退けて、愛と真理の理想世界を実現しようとする、新しい神の摂理が始まった。そして、20世紀後半から21世紀にかけて、神を否定するサタン側の思想と、それに対抗する神側の思想が激しく対決する時代となったのである。

2. 性解放理論の展開

倫理、道徳の中で核心となるものは性倫理であるが、キリスト教をはじめとする既成宗教が無力化するなかで今日、性倫理は大きく揺らいでいる。

フロイトはダーウィンの影響を強く受けていた。ダーウィンによれば、人間は人間以外の生物と異なる特別に高貴な存在ではなく、猿から進化したものであった。同様に、フロイトは、人間は動物と根本的に異なる霊的な存在ではなく、性的な本能に操られた動物的な存在であると主張したのである。

そのようなフロイトの主張に基づいて、ライヒ、マルクーゼに代表されるフロイト左派の性解放理論が生まれた。やがて性解放理論に裏づけられたフリーセックスの性革命が、1970年代のアメリカを中心として、世界に広がっていった。その結果、エイズの蔓延する世界となったのである。そして今、そのような危機的状況を迎えて、人々はようやく性解放の誤りに目覚めようとしている。しかし従来の宗教や倫理によっては、性解放思想を根本的に克服することはできないのであり、性解放の風潮は依然として世界中で猛威をふるっているのである。

愛と性は、道徳や倫理によって規制されるべきではないというのが、性解放理論の主張である。つまり道徳や倫理には確固たる根拠はなく、無意味なものであって、廃棄せよというのである。性解放理論は直接的にはフロイト左派によるものであるが、その理論の母体となったのはいうまでもなく、19世紀のマルクス主義、ダーウィン主義、フロイト主義の無神論であり、唯物思想であった。さらにこれらの19世紀の無神論・唯物論の原型となったのが18世紀の啓蒙思想であった。言い換えれば、18世紀の啓蒙思想は19世紀の無神論・唯物論の到来を準備したのであった。その中心的人物がジャン・ジャック・ルソーであった。次にフロイト左派の性解放理論の母体となった思想的な背景を見てみよう。

(1) ルソーの啓蒙思想

ルソーが理想として揚げたのは人間の自由であった。彼は「自然の状態においては、人間は自由であり、生を楽しむことができるが、社会においては、人間は自由を失い、不幸である」と考えた。そしてルソーは野生動物のような未開の自然人を理想とし、社会の中にある人間は悪に染まっていると見て、現在の政治や社会制度を否定することによって人間を解放しようとしたのである。

人間は本来、動物的な存在であると見るルソーの人間観は、マルクス主義の「衣食住を求めて労働したサル」、ダーウィン主義の「最も生存に適していたサ

ル」、フロイト主義の「性的な衝動に操られた動物」という動物的人間観へと展開していったのである。

ルソーは『人間不平等起源論』の中で次のように論じている。未開の自然状態において、不平等はほとんどなく、平和で幸福であった。ところが人間の精神の啓発にともない、産業が改良され、それが家をつくることを可能にし、そこに家族が生まれた。そして家族を基盤として私有財産が発生し、私有から対立が生じ、不平等の社会が成立したのである。このようなルソーの見解は原始共同社会では、人間は互いに協力し合い、すべてを共有していたが、生産力の発展とともに、家族が成立し、家父長制の社会が成立し、支配する者と支配される者、搾取する者と搾取される者の対立が生じたとするマルクス主義の原型となったのである。

ルソーは『学問芸術論』において、「ルネサンス以来の学問や文学や芸術の復興が人間から本来の自由の感じをうばいとり、奴隷状態を愛するようにさせている」と論じた。そして、礼儀作法は文明社会において、人間の本質を見失わせ、人間を疎外させるものであるといい、原始的な自然状態にこそ道徳の基礎があると見たのであった。結局、現存する人間社会の倫理・道徳を否定し、自然状態すなわち動物的状态に引き下げようというのであった。

(2) マルクス主義

マルクスは、原始状態の社会は自由で平等であり、すべてが共存であり、互いに助け合う社会であり、そこには人が人を支配するとか、人が人から搾取するというようなことはなかったと見た。エンゲルスは『家族、私有財産および国家の起源』において、アメリカの進歩的な人類学者モルガンの説を引用しながら（マルクスもモルガンの研究を高く評価していた）、次のように述べている。

原始の状態において男女の関係は全く規律のない自由なものであった。すなわち多妻制、多夫性の社会であって、「あらゆる女があらゆる男に、またあらゆる男があらゆる女に、一様に属していた」⁽¹⁾のである。つまり原始共産主義社会において、部族内での男女の性関係は、何の制限もない「無規律性交」の状態であった。そのように「禁制の障壁がかってはおこなわれていなかった」⁽²⁾のである。それは正にフリーセックスにほかならなかった。それでは、そのようなフリーセックスの原始状態から、いかにして一夫一婦制の家族制度が成立したのであろうか。

エンゲルスによれば、集団婚の原始共産主義社会は母権制であった。それは無規律性交の社会では、子供の父が誰であるか、確かでないが、その母が誰であるかは確かだからであった。そのような母権制のもとでは、子は父の氏族に属していないため、父は財産を子に相続させることができなかった。ところが富が家族の私有となり、増大するにつれて、富の生産に直接従事する男が、家族内で女よりも重要な位置を占めるようになった。その結果、母権が覆されることになった。母権の転覆とともに、無規律性交の社会は崩壊し、一夫一婦制の家族制度が現れることになった。それは自分の財産を、確かな自分の子供に相続させるという、経済的な条件から生まれたものであり、「男の支配のうえにきずかれた」⁽³⁾ものであったという。

それでは階級社会において成立した一夫一婦制の結婚は、共産主義社会においてはどうなるのであろうか。それにたいしてエンゲルスは、「[一夫一婦制は]消滅するどころか、かえって始めて完全に実現されるであろう」⁽⁴⁾といい、共産主義社会では、「相互の愛着以外には、まさにどんな動機も残らない」⁽⁵⁾ような婚姻、つまり愛のみに基づいた結婚となるという。しかし、それは何の裏づけもない空約束にすぎない。

実際、マルクスとエンゲルスは『共産党宣言』において、次のように語っている。

何にしても、共産主義者のいわゆる公認の婦人共有におどろきさわぐわがブルジョアの道徳家振りほど笑うべきものはまたとない。共産主義者は、婦人の共有をあらたにとりいれる必要はない。それはほとんどつねに存在してきたのだ。わがブルジョアは、かれらのプロレタリアの妻や娘を自由にするだけでは満足しない。公娼については論外としても、かれらは、自分たちの妻をたがいに誘惑して、それを何よりの喜びとしている。ブルジョアの結婚は、実際には妻の共有である。共産主義者に非難を加えたければ、せいぜいで、共産主義者は偽善的に内密にした婦人の共有の代りに、公認の、公然たる婦人の共有をとり入れようとする、とでもいったらよかろう。いずれにせよ、現在の生産諸関係の廃止とともに、この関係から生ずる婦人の共有もまた、すなわち公認および非公認の売淫もまた消滅することは自明である(下線は引用者)⁽⁶⁾。

これはブルジョア的な関係から生じる「婦人の共有」と「公私の売淫」は消滅し、共産主義的な公然たる「婦人の共有」になるということ、すなわち一夫一婦制の廃止とフリーセックスを公然と宣言するような発言である。

原始共産主義社会はフリーセックス社会であったという立場、そして一夫一婦制が経済的な支配のために成立したという立場から、真なる愛を中心とした一夫一婦制が成立するはずはないのである。また唯物弁証法の「否定の否定の法則」から見れば、最初の段階である原始共産主義社会が否定されて、第二の段階である階級社会になり、それがさらに否定されて第三の段階である共産主義社会になるが、その時、第三の段階は、高次元的に最初の段階に復帰するようになるのである。したがって、共産主義社会は高次元的な、文明の発達したフリーセックス社会になるはずである。

(3) ダーウィニズム

ダーウィンはクジャクの雄の美しい尾羽がいかなる自然選択によって生じたのか説明ができなくて心を悩ませた。そこで彼は性選択(雌雄選択)という概念をもち出した。すなわち、より美しい尾羽をもっている雄は雌に選ばれて繁殖行為に及ぶことができたが、みすばらしい尾羽をもっている雄は、雌に無視されて繁殖行為にあずかれずに淘汰されていったのだという。そして、そのような性選択の結果、次第に雄の美しい尾羽が進化したのだという。

性選択とは、雌は強くて美しい雄を選ぶということであり、雄同士は雌を奪い合って闘うということである。そのような性選択をよく表現している例が、ゾウアザラシのハーレムであり、女王バチと交尾する選ばれた一匹の雄バチ(他の多くの雄バチは殺されてしまう)などである。そのようなダーウィンのいう性選択の世界からは、人間社会における一夫一婦制を中心とした倫理というものは決して生まれるはずがない。生存競争を通じてサルが人間になったという進化論から見れば、人間社会においても、競争的、闘争的なフリーセックス社会にならざるをえないのである。

(4) フロイト主義

19世紀において性を罪悪視するキリスト教道徳が、絶対的な権威をもってヨーロッパの人々の心を支配していた。フロイトは医学者を志していたが、当時、ヒステリー(神経症の一例)と呼ばれた不思議な病気があった。ヒステリーとは、身体にはどこにも異常がないのに、眼が見えない、耳が聞こえない、口が

きけない、立てない、歩けない、感覚がなくなるなどの症状を示す病的状態であった。そのようなヒステリーの患者に対して、催眠術を用いてその原因を探る試みがなされていた。その結果、それらは一様に、性的なフラストレーションや、過去の幼児期におけるいまわしい性的な体験に関係していることが明らかになってきた。しかし性を悪しきもの、恥ずべきもの、恐ろしいものとするキリスト教の性道徳のもとで、医学界では誰もその見解を公表しなかった。そのタブーに挑んだのがジークムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) であった。

フロイトは催眠術のほかに、「自由連想法」、「夢判断」によって、患者の心の奥底にあるものを引き出していく精神分析の方法を探究していった。自由連想法とは、患者の意識に浮かぶ事柄を自由に発言させながら、抑圧の原因となっているものを見い出そうとする方法であり、夢判断とは、夢の中味を述べさせることによって、抑圧の原因を発見しようとする方法であった。

人間を根底から動かしているのは性的な衝動であるが、幼児期の性的虐待や結婚生活における性的フラストレーションなどによって、心の奥深くに傷が生じている。しかし性を罪悪視するキリスト教道徳のもとで、患者はその心の傷を忘れようとして、その記憶を意識の外に追い出してしまふ。それがフロイトのいう「抑圧」(repression)であった。そしてこのような抑圧された心の傷が表面化することによって神経症などの症状が生じていると結論したのであった。当時のキリスト教は、性を悪なるものであると断罪していた。ところがそのようなキリスト教社会において、隠れたところでは性的な欲望をこっそりと満たすという偽善や性犯罪が横行していた。患者たちはそのような封建的道徳の被害者であるとフロイトは考えた。そしてそのような封建的道徳に対してフロイトは反旗を翻したのであった。

(5) フロイト左派

フロイトは精神分析によって性的な抑圧を明かにすれば、患者の神経症は治ると考えたが、それだけでは何ら解決にはならないというのがライヒやマルクーゼなどのフロイト左派の主張であった。彼らは性の抑圧そのものを取り除かなければならないと主張した。すなわち、動物的存在である人間を檻の中に閉じこめるから、人間は病気になるのであって、檻を取り去って野生のままにまかせよ、そうすれば、人間は本来の姿になるというのである。人間を根底から動かしているのは性的エネルギーであり、それが抑圧されることによって神経症が生じるというフロイトの当初の出発点から見ればフロイト左派の結論は当然のなりゆきであった。このようなフロイトを元祖とするフロイト左派の性解放理論と、マルクス主義、ダーウィニズムに基づいた唯物論的思潮のもとで、今日のフリーセックス時代がもたらされたのである。

註

(1) フリードリッヒ・エンゲルス、村井康男他訳『家族、私有財産および国家の起源』

大月書店＝国民文庫、1954年、39-40頁。

(2) 同上、45頁。

(3) 同上、79頁。

- (4) 同上、97 頁。
- (5) 同上、105 頁。
- (6) マルクス＝エンゲルス、大内兵衛・向坂逸郎訳『共産党宣言』岩波書店＝岩波文庫、1971 年、65-66 頁。

II フロイト

(一) フロイトの思想

1. 性的外傷説から心的外傷説へ

フロイトの発見によれば、ヒステリーの鍵を握るのは性的な衝動であり、それが抑圧されると神経症(neurosis)の症状が引き起こされるのであった。そして、神経症におけるほとんどすべての問題は幼児期まで遡るのであり、幼児期における性的虐待が神経症の原因であると、フロイトは考えた。いかなる症状から出発したとしても、最後にならず性的体験の領域に到達するように思われた。

患者は幼いころに受けた性的外傷を思いだしたくないため、そして誰にも知られたくないために、心の奥底に押し込めていた、すなわち抑圧していたものが、後に体に転化して現れたものが、神経症のヒステリーであると、フロイトは考えた。そして精神分析によって、患者の心の深層を探り、抑圧の事実を明らかにすることによって、患者は神経症から解放されると考えたのであった。ラッセル・ベイカー(Rachel Baker)は抑圧について次のように説明している。

われわれが承認できない感情を抱き、これに正面から立ち向かい得ないとき、われわれは、その感情が存在しないように思い込もうとする。われわれは、それを、われわれの意識的注意から追い出す。われわれは、それを押しつける。のちになって、フロイトは、その理論を構成したときに、この行為を「抑圧」とよんだ⁽¹⁾。

ところが患者の幼児期の悪い思い出は、必ずしも真実ではないことが分かった。その後、フロイトは性的エネルギーであるリビドーの意味を、生理的欲求というように拡大して、幼児にも性欲があり、それは年代とともに変化していくという、幼児性欲説を唱えた。リビドーの発展段階を口唇期、肛門期、男根期(男女の性別に目覚める時期)、潜伏期、性器期とした。初めに口で満たされていたリビドーは、性器期に至ると性器で満たされるようになるというのである。

このリビドーの発展段階のどこかで、リビドーが満たされなかったり、拒絶されたりして、リビドーの発展に固着点があった場合、それが後の偶発的体験が契機となって、固着点に退行するとき、それが神経症として現れるという。つまり幼児期における心の傷——心的外傷(psychic trauma)——と後の偶発的な外傷的体験(post-traumatic stress disorder)とが、互いにそろった時、神経症という目に見える形になって現れるのだという。ラッセル・ベイカーは、固着(fixation)について次のように説明している。

しかし、もし、成長してゆく子供が進行を止められ、感情的成長の、一つの

段階から他の段階に移行してゆくことができないとき、すなわち、「固着」が生じたとき、彼は、他の方面では成長するであろうが、感情的にはナルチシズム期とかエディプスの愛着の段階とかに留まる場合が出てくることになる⁽²⁾。

ナルチシズム期とは、自分の身体のみ快感を見いだす、自己愛の段階であって、リビドーの発展段階の口唇期と肛門期に相当している。そしてエディプス期とは、異性の親を愛の対象として選ぶ時期であり、男根期に相当している。ラッセル・ベイカーは、神経症、ヒステリーの症状について次のように説明した。

このような人は、外面的には文明化しているが、内面的には原始的なままであるから、これに対して彼の意識は、彼を激しく罰する。……この内面の闘争は、さまざまな形をとって現われる。不成功、勉強での能力不足、神経症状、身体の病気、犯罪をふくめた反社会的行為および恐怖症、ヒステリー症状、強迫現象など神経の病気のすべての症状である⁽³⁾。

2. エディプス・コンプレックス

フロイトは、エディプス・コンプレックス(Oedipus complex)が、あらゆる神経症の核心にあると説いた。子供が異性の親と結びついたままで、エディプス・コンプレックスにうち克つことができない時に精神的疾患が起こる、というのが彼の仮説であった。エーリッヒ・フロム(Erich Fromm)によれば：

フロイトの言うエディプス・コンプレックスの意味は容易に理解できる。男の子はたとえば四歳ないし五歳という早い年齢に性的志向が目覚めるので、母親に対して強い性的付着と欲求をつのらせる。彼は母親を欲し、父親はかれのライバルとなる。彼は父親への敵意をつのらせ、父親に取って代わることを、そして結局は父親を殺すことを欲する。父親をライバルと感じるために、男の子はそのライバルたる父親によって去勢されることを恐れる⁽⁴⁾。

フロイトのいうエディプス・コンプレックスとは、次のようなギリシア神話のエディプス王の物語に基づいたものである。

テーベ(Thebes)の王レイアス(Laius)と王女ジョカスタ(Jocasta)に、ある予言者が不吉な予言をした。“あなたの子供は成人した後、その父を殺し、その母をめとるであろう！”子どもは生まれるとすぐに足を突きさされ、山中に捨てられ、死を待った。羊飼いが子どもを助け、子どもは他の国の王と王女の息子として成長した。……エディプスは道中で見知らぬ男——実はレイアス王——に出会い、口論のはてに男を殺してしまった。エディプスはテーベにたどりついた。街は、謎かけをして謎に答えられない者を食べてしまう怪物、スフィンクスの恐怖におびえていた。“朝は四歩足、昼は二歩足、夜は三本足、この動物の名は何ぞや？”“それは人間なり。幼きときは四本の足にて這い、成長したるのちには二本の足にて直立し、老いたれば杖でからだを支えるものなり”スフィンクスは敗れて海に身を投じた。エディプスはテーベの王となり、ジョカスタの夫となった。……エディプスは知らずにおかした自分の罪を知り、自分の両目を突いた。ジョカスタは自ら命を絶った⁽⁵⁾。(アッピグナネッセイ『フロイト』より)

この近親相姦幻想——母親に恋し父親を嫉妬する——を、フロイトはのちにエディプス・コンプレックスと名づけた。エディプス・コンプレックスを解消でき

ずに成長すると、それが神経症の発症に大きく関わってくるとフロイトは考えたのである。

3. 心の構造——イド、エゴ、超エゴ

フロイトは人間の心をいろいろな角度から分析しているが、最も新しい心のモデルでは、心はイド(id, ドイツ語でエス es)、エゴ(ego, 自我)、超エゴ(super-ego, 超自我)という三つの部分からなる。イド(エス)が心のいちばん古い部分であって、動物的な本能ともいうべきものであるが、エゴも超エゴもそこから生まれたものであるという。

フロイトはさらに、人間の心を根底から揺り動かしているのはリビドーという性的エネルギーであって、イド(エス)はリビドーの貯蔵庫であるという。つまり、イドの中に、リビドーが泉のように湧き出るということである。結局、リビドーすなわち性欲こそ人間のもっとも重要な駆動力なのである。

イドは盲目的な、動物的要求が宿っている所であり、人間精神の原始的な場所であり、暗いジャングルである。アンソニー・ストー(Anthony Storr)によれば、「エス[イド]は原始的で、明確な構成をもっておらず、情動的であり、‘非論理的なものの世界’である。エスとは、われわれの人格の、暗い、近寄りがたい部分である」。(6)

イドのみの人間は野生の動物的存在でしかあり得ない。野生の動物は勝手に異性と関係を持ち、性のために闘い、殺しあったりする。フロイトは人間がそのような野蛮な状態になることを恐れた。そしてフロイトは、イドからエゴ(自我)が生まれてくるとして、人間は自らエゴによってイドをコントロールすべきであると主張するようになった。エゴはジャングル(イド)の片隅にある文明化された所、ジャングルの中の開拓地であるという。

フロイトはイドとエゴの関係を暴れ馬と騎手の関係にたとえている。熟練した騎手によって、暴れ馬をよく操れば、馬は素直に騎手に従うようになるというのである。偉大な人は、内部に大量に蓄積している野蛮な衝動を飼いならし、方向づけ、上昇させる力と意志を発達させた者である。ラッシュェル・ベイカーによれば：

野蛮な衝動と人間の文明化された意志の間の闘争のうちに、ジャングルと開拓地の激しい戦いのうちに、フロイトは人生における、すべての成功と失敗の理由、文明のすべての創造的な仕事の源泉、すべての犯罪、すべての病気の原因があると考えたのである(7)。

フロイトはさらに、エゴの一部に裁判官の役割をする場所があるのであり、それを「超エゴ」(超自我)と呼んだ。超エゴとは、「～してはいけない」と命令する裁判官のような内面の権威である。超エゴは両親、特に父親からの叱責、キリスト教を始めとする宗教の戒律に由来するものであるという。超エゴがエゴを監視し、エゴがイドを抑圧、コントロールしているというのである。

フロイトは、神経症の患者のみならず、自分自身をも治療した治療家であり、彼以前の、どの思想家よりも人類の心の内部を深く覗いた人間であり、彼は人間の野蛮な心のなかを覗き続けたのである(8)。

4. 昇華

フロイトは、人間の心を根底から揺り動かしているのはリビドーであるという。

ところがリビドーの宿るイドの衝動のままに生きる人間は野獣と変わらない。そこでフロイトはイドの野蛮な力を「昇華」(sublimation)させなくてはならないと主張した。昇華とは、リビドーのエネルギーを必要な現実適応に向けさせることであり、イドの野蛮な力を新しい目的に転じてゆくことである。つまり、昇華とは、本能的欲求が、政治、芸術、音楽などの直接的満足以外の目的に向け換えられる過程をいうのである。イドの衝動が表面化して外に出ないように、あるいは前面に出ないようにすることであった。これはまさに「クサイものにフタ」をすることである。

ラッセル・ベイカーは、昇華について、「すべての人間は自分の心のなかに荒れ狂っている強い衝動を操る力を発展させねばならないのだ。これこそ、おとなになるという意味であり、それは、われわれの内部にある野蛮な力を、役に立つ目的に昇華する能力である」⁽⁹⁾ と言う。

フロイトはリビドーを昇華させることにより、芸術、文学等の文化が生まれると考えた。すなわち、あらゆる芸術や文学は、満足を得なかったリビドーの昇華から生まれるとフロイトは信じていた。ところがエゴの力が弱くて、イドの力を昇華できなかつたり、あるいは超エゴの力が強すぎる場合、人は神経症になるという。ラッセル・ベイカーによれば：

フロイトは、イドの本来の力、つまり、発散できない野蛮な願望や衝動があって、自我が弱すぎて、これを昇華できないようなとき、病気をおこすことを示した。彼はまた、超自我または良心の要求が強烈すぎて、われわれが、ときに、われわれ自身に対して残酷すぎる扱いをすることも指摘した⁽¹⁰⁾。

5. 性と愛

フロイトは、愛は人間にとって本質的なものでなく、性的エネルギーに付随するものと見なしている。すなわち、フロイトにおいて、性が先にきて、愛情は後である。そして人間の心には、本来、強固な敵意が秘められていて、愛などによって多くの人間を結び合わせるなど、とてもできないと、フロイトは考えていた。アンソニー・ストーによれば：

フロイトの頭には、友情のような、それ自体が価値あるようなタイプの人間関係はない。あらゆる人間関係は、「目標を禁じられた」性的関係の代理物である。フロイトが「おのれのごとく隣人を愛せ」というキリスト教の戒めを否定したのも当然だ⁽¹¹⁾。

フロイトは「人間はすべての女性を征服しようとする果てしのない願望によって操られている⁽¹²⁾」と見ている。野生の動物世界において、雄は雌をめぐる雄同士が戦い、勝ち抜いた強い雄が多く雌を独占するように、人間においても、男は多くの女を征服しようと男同士が争うというのである。

6. 快感原則と現実原則

フロイトによれば、人間は快感原則(pleasure principle)と現実原則(reality principle)という二つの原則に従っているという。イドが快感原則——快を求め、不快を避けること——に従っているのに対して、エゴは、現実原則——欲求をそのまま満たすことを我慢して、現実に見合った形でみたそうとすること——に従おうとする。かくしてエゴにより、人間のからだに満足感の遅れや延期を我慢させ、人は「考える」ようになるのである。デイヴィッド・コーエン(David Cohen)

は次のように述べている。

イドは、各人の本能的エネルギーの無意識的源泉である。それはリビドー——性的欲望であり生きる力——の巨大な貯蔵庫である。“快感原則”に従って、がむしゃらに手っ取り早い満足を追求する。この衝動の塊から、パーソナリティの現実的で合理的な部分である自我が発達してくる。自我はイドを満足させようとするが、現実世界の制約の枠内でそれをしなければならないことを承知している⁽¹³⁾。

生まれたばかりの赤ん坊の心は、大部分がイドで占められているが、イドはただ、快感原則に支配され、本能的欲求を満足させようとするだけである。やがて赤ん坊が成長するにつれて、エゴが発達し、現実原則に従うようになる。

快感原則と現実原則はたがいに相反するように見える。しかしながら、フロイトにおいては、「快感原則と現実原則はたがいに相反するものではなく、……現実原則は、同じ目的——つまり快感——を得るためのより時間をかけた複雑な過程にすぎない⁽¹⁴⁾」のである。

7. エロスとタナトス

フロイトによれば、人間は本来、野蛮な性的人間、あるいはむしろ性的動物といふべきものであり、たがいに憎しみと敵意を抱く存在であるとされていた。そしてリビドーの宿るイドを別の形態に昇華させることによって、人間は、人格的な文化的な存在になるというのであった。愛などによって人間を結び合わせるなど、とてもできないと、フロイトは考えていた。ところが1920年以後、フロイトは、性本能と自己保存本能を統合した生命力という意味で「エロス」(Eros)という言葉を用いて、エロスによって人と人は結びつけられると主張するようになった。フロイトはさらに、エロスに対立する破壊本能としての「タナトス」(Thanatos)が人間の内部にあると主張した。フロイトは次のように書いている。

長い躊躇と動揺を経て、われわれはついに二つの基本的本能、エロスと破壊本能の存在を認めることに決めた。……前者の目標は、統一体を確立して、それをどんどん大きくしていき、それを維持する、要するにしっかり繋ぎ留めておくことである。後者の目標は反対に結合をばらばらにし、それによって事物を破壊することである。破壊本能の場合、その最終目標は生物を無機的状态に導くことだと考えられる。それゆえ、この本能を死の本能と呼ぶこともできよう⁽¹⁵⁾。(『精神分析学概説』)

小此木啓吾は、本来、狼のような人間が、エロスによって互いに親密な関係になるという。

「人はみな狼」の喩えのように、それぞれの欲望、自己主張、競争心をもち、お互いに対立し、敵対し合っているはずなのに、社会集団を形成し、その中で生きる場合には、何故これらの対立・敵対関係を抑圧し、友好的で親密な感情を共有するのであろうか。ひとえにそれは、お互いを結びつけるエロス(性愛)があるからである⁽¹⁶⁾。

エーリッヒ・フロムは、フロイトのいうエロスとは、フロイトの原点であった性とは

異なる、全く新しい概念であるという。

エロスの理論においては、人間はもはや本来孤立した自己中心的な存在として、機械人間としてとらえられることはなく、本来他人と関係を持っていて、彼をして他人との結合を要求せしめる生の本能に動かされる存在として、とらえられる。生命、愛、成長はまったく同じものであり、性愛や〈快樂〉より深い根を持ち、より根本的なものである⁽¹⁷⁾。

かくしてフロイトはエロス理論を持ち出すことによって、古い二元論——エゴとイド（リビドー）——に代わって、新しい二元論、すなわちエロスとタナトス（死の本能）の戦いを提示したのである。アンソニー・ストーは、フロイトの提示した「エロスとタナトスの戦い」について、次のように述べている。

文明とは、エロスに仕える一つの過程である。エロスの目的は、個々人を、人類という一つの大きな単位へと統一することである。……ところが人間に生まれつきそなわっている攻撃本能、すなわち万人の万人にたいする憎悪が、この文明の計画に反対する。この攻撃本能は、エロスとならんで宇宙を支配する二大原理の一つである死の本能から生まれたものであり、死の本能を代表しているものである。……文明とは、人類の間で繰り広げられる、エロスと死との、生の本能と破壊本能との、戦いなのである。……したがって文明の進展はたんに、生に向けての人類の戦いであると言うことができよう⁽¹⁸⁾。

フロイトはエロスとタナトスという善と悪の闘いという壮大なビジョンを打ち出したのであった。アンソニー・ストーによれば、

ウィーンの上流階級の神経症を理解しようと必死になっていた医師がその研究から、人間の条件に関するこんなに壮大な概念を引き出すとは、誰が予想していただろうか。性と攻撃の二重性の探究は、善と悪という二つの大きな力が対立するという宇宙的なヴィジョンへと変えられた⁽¹⁹⁾。

8. 性の民主主義、理性の崇拜

「イドと超エゴに対して、ともに闘え」

キリスト教道徳による性の抑圧に反旗を翻したフロイトであったが、結局、人間は一人一人、自ら性をコントロールすべきであると主張したのである。すなわちフロイトは、性に対するキリスト教による封建主義的、君主主義的、専制的な抑圧から人々を解放し、人間が主体的に性をコントロールする「性の民主主義」を主張したのであった。言いかえれば、彼は外的な強制的な性の抑圧に反対し、内的な自律的な抑圧を説いたのである。フロイトの有名な言葉がある：

精神分析療法の意図は、自我を強くし、もっと超自我から独立させ、その組織を拡大し、それによって自我がエスの新しい部分を自分のものにできるようにすることである。かつてエスがあったところに自我をあらしめなければならない。それは一つの文化事業であり、オランダのゾイデル海の干拓と似たようなものである⁽²⁰⁾。（『続・精神分析入門』）。

「自我」は、イドに対抗して自己を防衛するように、「超自我」に対しても自己を防衛しなくてはならない⁽²¹⁾。すなわち、「エゴはエス（悪しき衝動）と超自我

(封建的道德)に対してともに闘え⁽²²⁾」というのである。

9. 性道德の破壊と宗教の否定

フロイトは道德や倫理の起源に関して、次のような「原父殺害」の仮説を立てた。原始の遊牧民において、父親(原父)は絶対的な権力をもち、女たちを独占し、息子たちを排除し、従属させていた。そこで息子たちは父を憎み、殺して食べてしまった。その後、父を殺したことを悔い改めた息子たちは、このような行為を再び繰り返さないようにするために規約をつくった。すなわち、殺害した父を神として崇めて、父を象徴するトーテム獣を殺すことを禁じたことと、同族の女たちをめぐる争うことのないように近親相姦を禁じたことである。それは「一種の社会契約」であって、それが「道德と法のはじめ」であったという。原罪といわれる罪の意識や宗教や倫理の起源も、この「原父殺害」にあるという。

そのようにして、恐れられ、憎まれ、尊敬され、うらやまれていた父が、神として崇められるようになったのであり、宗教とは「父コンプレックス」の土台の上に成立したものであった。このようなフロイトの解釈によれば、道德や倫理は絶対的な父権を中心とした権威体制の反映であり、一種の強迫観念的な掟であった。そのようなフロイトの立場から見れば、キリスト教は一つの集団幻想であり、空想の産物にすぎなかった。結局、フロイトにおいて、神とは架空の存在であり、規範とは、権威的、抑圧的な「掟」であり、一種の「タブー」であった。

フロイトによれば、個人の幼児期の体験が脅迫的な力をもって個人の心理の中に迫ってくるのが強迫神経症(obsessional neurosis)であり、小児期神経症(childhood neurosis)である。おなじく個人の幼児期の体験がおとなの社会に投影され、強迫的な力をもって集団心理の中に迫ってくる集合的神経症(collective neurosis)が宗教であるという。つまり、宗教は、個人の幼児期体験の外界に投影されたもの、すなわち幻想であると言い切ったのである。

ピーター・ゲイ(Peter Gay)が言うように、「宗教信仰とは一種の文化的神経症だというフロイトの極端な信念なのだ。彼はこれを公言していた。すなわち、宗教は大人の生活のなかでの幼兒的無力感の遺物であり、願望思考の最良の事例、妄想的な病気すれすれの幻想なのである⁽²³⁾」。

フロイトは科学の発展とともに宗教は崩壊すると信じていた。ピーター・ゲイによれば、「ディドロは1759年に‘宗教は哲学が進むに応じて後退する’と書いていた。フロイトもこれに同意した。善意の人間が科学の家を建てることのできるのは、宗教の廢墟の上のみであろう、と。彼[フロイト]は科学と地盤を争うことのできる三つの勢力——芸術、哲学、宗教——のうち、‘手強い敵は宗教だけである’と書いた⁽²⁴⁾」のであった。

フロイトは、『ある幻想の未来』の中で簡潔に述べているように、「理性より以上の控訴審は存在しない⁽²⁵⁾」と考えていた。そして「人間は、自分が自然の主となり、また自分自身の主となるまで、理性を發展させて行かねばならない⁽²⁶⁾」というのがフロイトの信念であった。かくしてフロイトは、理性の名の下で、宗教に宣戦布告を行ったのである。

(二) 統一思想から見たフロイト思想

1. 性的外傷説から心的外傷説へ

フロイトは始め、神経症の原因を幼児期における性的虐待によるものと見て、

性的外傷説を唱えた。しかし、必ずしもそうでないことを悟り、後に、幼児にも性欲があり、それは年代と共に変化していくという幼児性欲説を主張するようになった。そして人間の心を根底から動かしている性的エネルギーであるリビドーが、過去のある時期において阻止され、満たされなかった体験——心的外傷（トラウマ）——によって、リビドーの固着があった場合、後に何らかの偶発的な外傷的体験によって、その過去のリビドーの固着点に無意識に退行して起きる現象が神経症であると説いた。

しかし統一思想から見れば、人間を根底から動かしているのは性的エネルギーではなく、心情（愛したい、愛されたいという衝動）である。したがって、人間の心の傷となって神経症を引き起こしている本質的なものは、幼児期の心的外傷によるリビドーの固着ではなく、心情の傷であり、愛の傷である。心的外傷も、もちろん傷の一部をなしているが、それがすべてではない。より根本的には愛の傷なのである。すなわち父母から、兄弟姉妹から、あるいは周囲の人たちから冷たくされたり、虐待されたり、あるいは周囲の期待に答えられなくて挫折したりしたことによる愛の傷が原因なのである。

さらに心理的な問題は、幼児期の体験のみならず、霊界の先祖たちまで、さかのぼる。すなわち、われわれの心の傷は、幼児期の心の傷のみならず、先祖たちの心の傷（悲しみ、怨み、憎しみなど）も加わっているのである。なお先祖たちの心の傷には、他人から受けた傷と他人に与えた傷がある。他人に与えた傷は、傷を受けた人（霊人）の怨念となって地上の子孫であるわれわれにふりかかっているのである。したがって心の病気の解決は、個人の幼児期からの精神的な治療だけでは不十分であり、霊界までさかのぼって先祖たちの心の傷を解決することまでなされなくてはならないのである。

カール・ユングは、個人の意識の下には個人的無意識（各人独自の経験に由来する抑圧された記憶や欲望）が横たわっているが、さらに深いところに集団的無意識（われわれの先祖から相続した記憶や行動パターン）があると考えた。そのようなユングの心理学は統一思想の見解を裏づけるものといえよう。

心の傷を癒すのは真の愛であるが、愛によって幼児期からの心の傷を癒すのみならず、霊的に先祖の心の傷を癒していくことも必要である。ここに宗教的な先祖の供養とか、先祖の解怨の意義がある。しかしながら、心理的な治療のみならず、形状的な生理学的治療も必要である。すなわち、性相的には霊界の先祖解怨と精神療法を行いながら、形状的には最先端の現代医学による生理学的治療もなされなくてはならない。

2. エディプス・コンプレックス

フロイトはギリシア神話に基づいて、幼い男の子は、母親に対して性的な関心を抱き、母親を独占したいと願い、そのために父親にたいして憎しみの衝動を抱くという。これが男の子のエディプス・コンプレックスである。他方、女の子は男性性器のない母親に幻滅し、母親を憎み、父親に愛情を向けるようになる。これが女の子のエディプス・コンプレックスであるという。

統一思想から見ると、ギリシア神話に由来するエディプス・コンプレックスとは、父母が子女を愛する父母の愛と、子女が父母を愛する子女の愛に、ゆがんだ性愛を混入させたことから生じたものであり、心の中の暗闇に焦点をあてたものである。本来、父親が娘を愛する愛も、母親が息子を愛する愛も、性愛とは無関係である。また娘が父親を愛する愛も、息子が母親を愛する愛も、性愛とは無関係である。しかるに人間始祖アダム・エバの墮落によって、墮落した男女の愛が、愛全体の中に混入するようになったのである。その結果、近親相姦が生

まれ、エディプス・コンプレックスのようなものも生まれたのである。

子女は母の愛に抱かれながら成長し、父の愛でたくましく育てられる。子女にとっては、母の愛と父の愛の両方が必要である。そのような父母の愛の下で子女は成長していくのである。一方、子女が父母を愛するとき、父母はそのような子女の愛を可愛らしく思い、より一層子女を愛するようになる。そのような本然の父母の愛、子女の愛は、性愛とは全く無関係である。結局、ギリシア神話もフロイトも、墮落した愛、ゆがんだ愛を見つめたのであった。

神経症はエディプス・コンプレックスが解消されなかったから生じるのではない。幼児期に、父母から愛されなかったこと、あるいは虐待されたこと、周囲の人からいじめられたこと、挫折したことなどが心の中に愛の傷として残り、その傷を受けた心理状態に退行することによって生じるのである。さらに、すでに述べたように、幼児期のみならず、先祖からの影響もあるのである。

エーリヒ・フロムも「フロイトが誤っていた点、また彼の前提のゆえに誤らざるをえなかった点は、母親への付着を、本質的に性的性質を持ったものと理解したことである」⁽²⁷⁾と述べている。

3. 心の構造——イド、エゴ、超エゴ

フロイトのいうイド（リビドーを含む）とエゴからなる人間の心の構造を図示すれば、図1のようになる。

フロイトにおいて、エゴの役割はジャングルの猛獣が互いに争わないように「檻に入れること」または「柵で仕切ること」である。ジャングルの猛獣は互いに殺し合ったりして危険であるが、檻の中に閉じこめたり、柵で仕切ることによって争わなくなる。それと同じように、エゴによってイドを抑えることによって、動物的な人間が文明的な人間になるというのである。

フロイトのいう文明社会とは、猛獣たちを檻に入れた平和な動物園のようなものである。しかし猛獣は檻から放てば元の猛獣に戻るのみである。結局、フロイトの見た人間は本質的に野獣的な性的動物なのである。フロイトの「人間[男]はすべての女性を征服しようとする果てしのない願望によって操られるもの」という言葉がそのことをよく表している。

フロイトのいうイドとエゴは統一思想から見れば、生心と肉心に相当するといえる。しかし、統一思想において生心は霊人体に宿る心であるのにたいして、人間の霊性を認めないフロイトにとって、エゴは根拠のないものである。フロイトはイドという衝動の塊から、エゴが発達してくると考えていた。しかし、いかにして動物的なイドからエゴが発達するのか、なぜ動物にはエゴが発達しないのか、不明である。フロイトは人間の霊性を認めていないので、彼のいうエゴは根拠のないものであった。

さらにフロイトはエゴによってイドを抑圧せよと主張したが、統一思想の観点から言えば、真の愛を中心とすれば、肉心は生心に共鳴し、自然に従うようになるのである。フロイトにとって、性とは獣的なものであって表面化しないように抑圧すべきものであった。しかし統一思想から見れば、真の愛を中心として生心と肉心が円満な授受作用を行うとき、肉心の性は聖なるものとなるのである。

心情、すなわち「愛して喜びたい衝動」は人間の心の中で最も核心となっているものである。したがって統一思想の観点から人間の心の構造を図示すれば図2のようになる。すでに述べたように、フロイトのいうエゴとイドはそれぞれ統一思想のいう生心と肉心に相当する。しかるに図1と図2を比較すれば、フロイトと統一思想の見る人間の心の構造は、重要さの順序がまさに正反対になっていることがわかる。

生心と肉心が一つになるための究極的な要因は心情から湧きいずる真の愛である。真に子供を愛している父母は、自分の肉心の欲求を満たすよりは、まず子供によく食べさせ、よく着せ、よく住ませたいと願う。自分の欲求を満たすよりはそのほうが父母の喜びとなるのである。また子供が危機に瀕するときには、わが身を顧みずに、火の中、水の中に飛び込んで救おうとする父母の例は枚挙にいとまがない。従って、真の愛を中心として生きるようになるとき、肉心は生心に自然に従うようになり、肉心は生心に共鳴するようになるのである。

マルクス主義は「人間はなによりもまず飲み、食い、住み、着なければならぬ」、「猿が労働して人間となった」と見ている。すなわちマルクス主義の人間観は「衣食住を求めて労働した猿」である。ダーウィニズムは、人間は衣食住と性を追求してやまない、「生存の本能に駆られた動物」であり、生存競争に勝ち抜いた「生存に適した猿」である。フロイトにおいては、人間は性的な衝動に駆られている「性的人間」であり、「性的動物」である。結局、マルクスも、ダーウィンも、フロイトも、人間を本能的、動物的存在と見たのであった。

フロイトによれば、キリスト教封建道徳の下で、人間は抑圧されていた。超エゴとはキリスト教封建道徳の内化されたものであり、その超エゴの支配のもとでイドの衝動が強制的に抑圧されていた。フロイトのいう、キリスト教道徳の下での抑圧された人間像を表示すれば、図3のようになる。

フロイトの人間観の原点は「性的人間」であったが、やがてフロイトは、超エゴによってイドを強制的に抑圧するのではなく、個人が自律的(self-regulating)にイドを抑圧すべきであると主張した。かくして、フロイトの人間観は「性的人間」から「理性的人間」の装いをしたのであった。フロイトのエゴとイドからなる人間観、統一思想の生心と肉心からなる人間観を統一思想の四位基台構造の観点から表示すれば、図4のようになる。さらにキリスト教道徳下における神経症の発症のメカニズムを図示すると図5のようになる。

4. 昇華

エゴによるイドのコントロールの方法としてフロイトが考えたのが、「本能的欲求が、政治、芸術、音楽などの直接的満足以外の目的に向け換えられる過程」としての「昇華」であった。すなわち、リビドーのエネルギーに駆られた野蛮なイドが表面化して外に出ないように、あるいは前面に出ないようにすることであった。これはまさに「クサイものにフタ」をすることである。フロイトのいう昇華を図示すれば図6のようになる。

フロイトはイド(リビドー)を昇華させればよいと言うが、イド(リビドー)を昇華すれば、人は必ずしも人格的存在となるのではない。芸術家、芸能人、スポーツ選手に不倫が蔓延している現実が、それを証明している。統一思想から見ると、人間は、真の愛を中心として、生心と肉心が主体と対象の関係で円満な授受作用を行う時、肉心すなわち本能的な心は生心に自然にしたがうようになる。そのとき、性は悪しき衝動ではなくて、聖なるものとなる。真の愛は、自己中心的な、自分の欲望を満たそうとする愛ではなくて、与える愛、ために生きる愛である。相手をいたわり、人格を尊重し、相手の喜びが、自分の喜びとなるような愛である。

人間を根底から動かしているのはリビドー、すなわち性的エネルギーではない。人間は愛し、愛されたいという愛の衝動に動かされている愛的人間である。すなわち、神を愛し、神から愛されたいと願う、人を愛し、人から愛されたいと願う、万物を愛し、万物から慕われたいと願うのが人間の本性なのである。

5. 性と愛

フロイトにおいて、愛とは「性的結合を目標にしたところの性愛」のことであった。そこには本来の愛というものは全く見られない。そして実際、フロイト主義者たちによる『精神分析用語辞典』を見ても、そこには「愛」という言葉は見当たらず、あるのは「性器愛」という表現だけなのである⁽²⁸⁾。結局、フロイトの思想は人間の霊性を否定し、愛を性欲に還元するものであり、愛を窒息させようとするものであった。フロイトの人間観は正に「性的人間」であり「性的動物」であった。それに対して、統一思想の観点では、性は真の愛のためにあるのであって、愛が主体、性は対象である。したがって、統一思想の人間観は「愛的人間」であり、「情的存在」である。

6. 快感原則と現実原則

フロイトによれば、快感原則とは、快を求め、不快を避けようとするイドの従う原則であり、現実原則とは、欲求をそのまま満たすことを我慢し、延期する、エゴの従う原則であるという。そして現実原則も結局は快感を求めるための時間をかけたプロセスであって、両者はともに快感を求めているのだという。そのような人間は衣食住と性欲を中心とした本能的な存在であって、真善美と愛の価値を求める人格的存在ではない。結局、現実原則に従う人間とは、行儀のよい動物と変わらない。

統一思想の観点からみると、人間が従うべき原則とは、生心が従うべき規範(倫理、道徳)である。それは肉心の欲求を我慢し、延期させるためのものでなく、肉心の機能を真の愛の実現へと導くための愛の道しるべであり、愛の道である。

7. エロスとタナトス

フロイトは、愛などによって人間を結び合わせるなど、とてもできないと考えていた。ところが後に、フロイトは、性本能と自己保存本能を統合した生命力という意味でエロスという言葉を用いて、エロスによって人と人は結びつけられると主張するようになった。性的エネルギーであるリビドーは本来、敵対的であるとされていた。ところがエロスと言っても性本能に自己保存本能が加わっただけで、性本能とあまり変わらない。実際、フロムが指摘しているように、『自我とエス』(1923)において、彼はエロスを性本能と同一視しているのである⁽²⁹⁾。ところがなぜ、リビドーは敵対的なもので、エロスは友好的なものなのか、納得いく説明がなされていない。

8. 性の民主主義、理性の崇拜

「イド(エス、悪しき衝動)と超エゴ(封建的道徳)に対してともに闘え」というのが、フロイトのモットーであった。それを図7に図示する。

マルクスは資本主義社会において、資本家と労働者の階級対立があり、資本家が労働者を支配し、搾取していると見た。そして労働者が資本家を倒して、すべての人が労働者になれば、労働者は解放され、自由な理想社会が実現できると考えていた。しかし実際は、労働者の代表であるという名の下に、共産主義者が権力を奪取し、共産党が人民を暴力で支配する独裁社会となってしまった。

一方、フロイトは心理的な葛藤からの解放を叫んだ。すなわち人間の心の中にはイド(リビドー)とエゴの葛藤があり、さらに超エゴによる抑圧があると見た。

そして、各自の自律的な理性によって、イドの悪しき衝動と闘い、さらに超エゴによる抑圧と闘えと叫んだのである。かくして人間は解放され、理想的な姿になると、フロイトは考えたのであった。経済的抑圧からの解放を叫んだマルクスに対し、フロイトは心理的な、性的抑圧からの解放を叫んだのであった。

しかしその結果、フロイトは絶対的、普遍的な規範を否定することにより、性行動の決定は個人の意思にまかせるべきであるという‘性の自己決定 (self-determination)’の主張に道を開くことになった。さらに人間を本来、性的な存在と見ることから、自然の成り行きとして、フロイト左派の性解放理論が生まれることになった。フロイト自身は性解放には反対であったが、彼の理論は、下半身では性本能、上半身では理性主義というものであった。それはフォイエルバッハにおいて、下半身は唯物論、上半身は観念論であって、自己矛盾していたのと同様に、フロイトにおいても自己矛盾を抱えていたのである。

フロイトのそもそもの出発点は、人間は性的衝動に駆られた本能的な存在と見るところにあった。ところがエーリッヒ・フロムが言うように、「フロイトは決して性的自由思想の代弁者ではなかった。むしろ反対に、私が前に述べようとしたことだが、彼の理想は情熱を理性によって統制しようとしたことであつたし、彼自身の性に対する態度は、ビクトリア風の性的習慣の理想に従っていたのである⁽³⁰⁾」。そのように、フロイトの主張には自己矛盾があった。

フォイエルバッハにたいして、下半身は唯物論者であるが、上半身は観念論者であると言って批判したのはマルクスであった。そしてマルクスは全て唯物論で一貫している理論を構築しようとしたのであった。同様に、フロイトの矛盾性を批判するライヒやマルクーゼのようなフロイト左派が生まれた。彼らは性本能、リビドーに基づいた一貫した理論を構築しようとした。その結果が性解放理論となったのである。

統一思想の観点では、エゴとイドの関係は生心と肉心の関係であるが、両者は対立、闘争の関係ではない。愛と規範を中心とするとき、生心は肉心と円満な授受作用を行い、両者は共鳴するようになる。すなわち、肉心は生心に自然と従うようになるのである。フロイトはさらに、超エゴを構成しているものは宗教的道德であって、それが人間を抑圧しているというのが、宗教の教えは、本来、人間を抑圧するものではない。神の戒め、ロゴス、天道と呼ばれるものは、真の愛を実現するための規範である。規範を守ることによって、愛が真なる愛として現れるのであり、規範を守らない愛は、かえって破壊的な愛となるのである。

9. 性道德の破壊と宗教の否定

フロイトによれば、個人の幼児期の体験がおとなの社会に投影され、強迫的な力をもって集団心理の中に迫ってくる集合的神経症 (collective neurosis) が宗教であるという。つまり、宗教は、個人の幼児期体験の外界に投影されたもの、すなわち幻想であると言う。

フォイエルバッハは、不完全で不安な人間が完全であることを願い、理想的な人間像を心の中につくりあげて、それを外部に対象化して崇めるようになったのが神であるとして、宗教は幻想にすぎないと考えた。それに対してフロイトは、幼児期の無力感が大人の心に投影された集合的な幻想が宗教であると考えた。両者ともに宗教を幻想と見ているが、フォイエルバッハが宗教を個人の幻想と見たのに対して、フロイトは集団的な幻想と見たのであった。

そのように、フロイトは幼児期の心理を根拠として、伝統的な性道德を破壊し、宗教を否定し、ひいては神の存在を否定したのである。しかしフロイト理論の土台となっているエディプス・コンプレックスや原父殺害説自体、根拠のな

いものであった。それは人間の心の暗闇を見つめたものであった。すなわち、エデンの園における墮落行為——神の存在を否定する悪の元凶であるサタンが引き起こした人間始祖の墮落行為——を反映するものにほかならない。そのような心の暗闇が取り除かれるとき、光の中に、実在する神が現れてくるであろう。そして、神の言に由来する性道徳を受け入れるとき、われわれは真なる愛の完成へと導かれるのである。

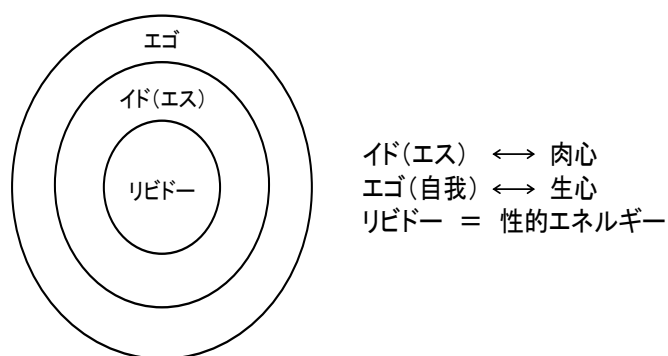


図1 フロイトの見た人間の心の構造

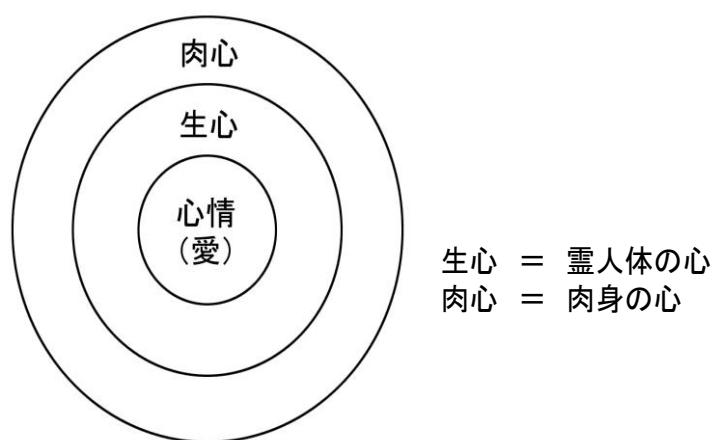


図2. 統一思想から見た人間の心の構造

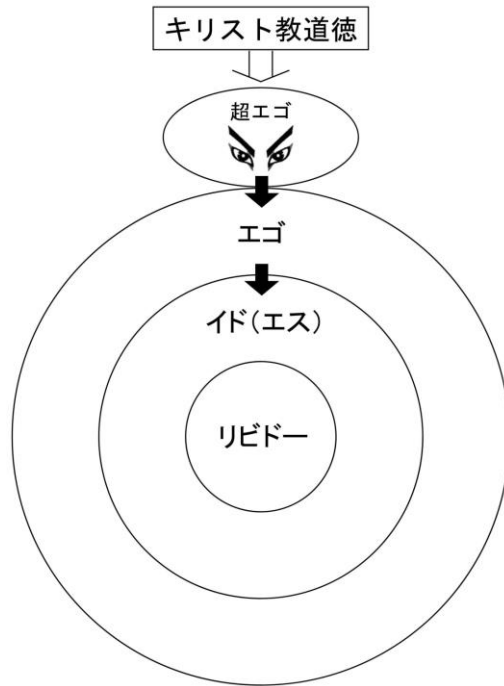


図3. キリスト教道徳の下で抑圧された人間像

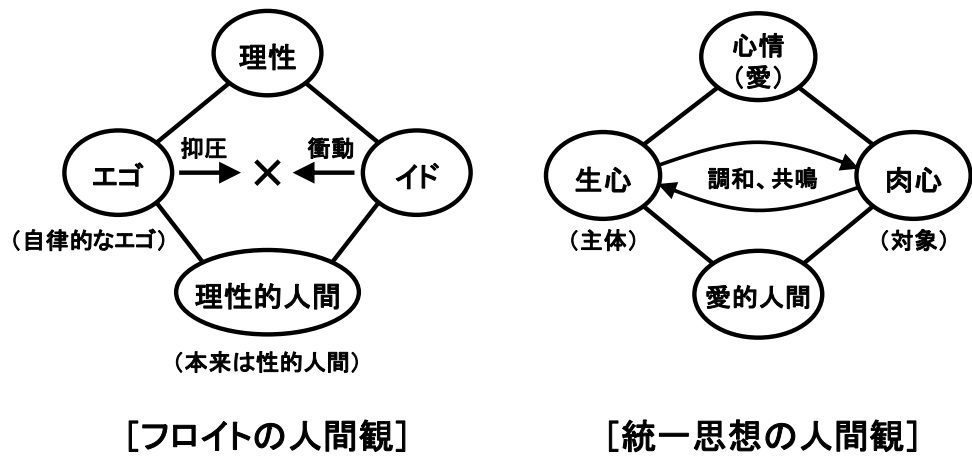


図4. フロイトと統一思想の人間観

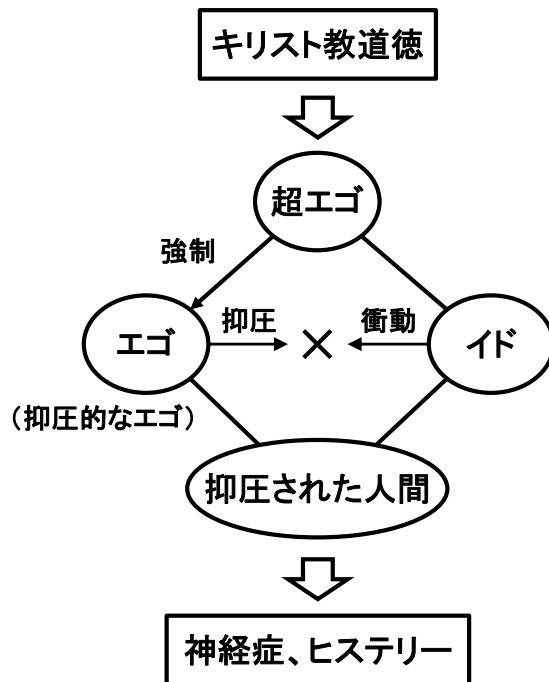


図5. フロイトの見た、キリスト教道徳下における神経症発症のメカニズム

野蛮なイドを昇華せよ

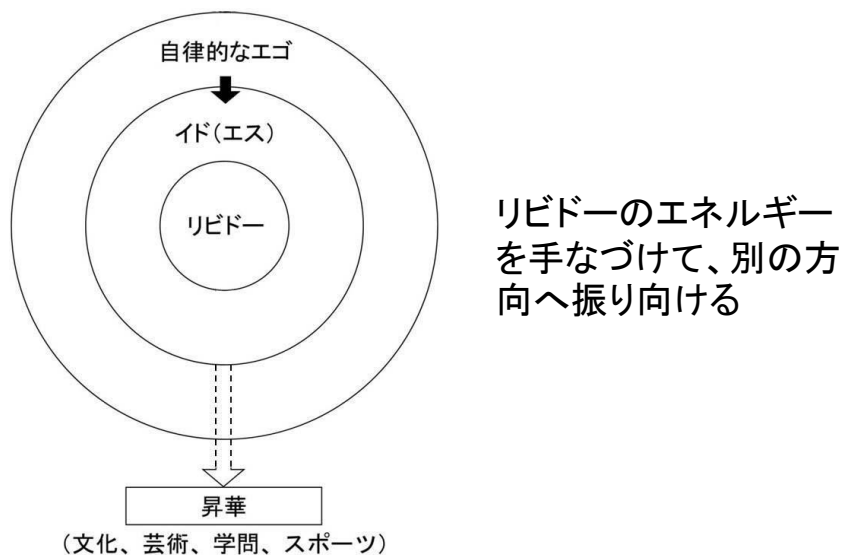


図6. リビドーのエネルギーの昇華

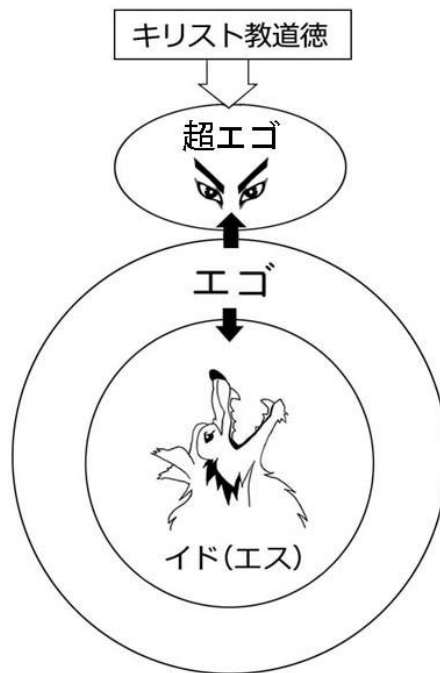


図7. 「イドと超エゴに対してともに闘え」

註

- (1) ラッセル・ベイカー、宮城音弥^{おとみや}訳『フロイト・その思想と生涯』講談社、1975年、93頁。Rachel Baker. *Sigmund Freud for Everybody*, Popular Library, New York, 1955.
- (2) ラッセル・ベイカー『フロイト』159頁。
- (3) ラッセル・ベイカー『フロイト』159頁。
- (4) エーリッヒ・フロム、佐野哲郎^{てつろう}訳『フロイトを超えて』紀伊国屋書店、1980年、46-47頁。Erich Fromm. *Greatness and Limitations of Freud's Thought*, Harper & Row Publishers, New York, 1979.
- (5) リチャード・アッピグナネッセイ、加瀬亮志^{りょうじ}訳『フロイト』現代書館、1980年、56-59頁。Richard Appignanesi and Oscar Zarate. *Introducing Freud*, Icon Books, UK, 1999.
- (6) アンソニー・ストー、鈴木晶^{あきら}訳『フロイト』講談社、1994年、78-79頁。Anthony Storr. *Freud: A very Short Introduction*, Oxford University Press, New York, 1989.
- (7) ラッセル・ベイカー『フロイト』197頁。
- (8) ラッセル・ベイカー『フロイト』199-200頁。
- (9) ラッセル・ベイカー『フロイト』198頁。
- (10) ラッセル・ベイカー『フロイト』214頁。
- (11) アンソニー・ストー『フロイト』153頁。
- (12) エーリッヒ・フロム、懸田克躬^{かくだかつみ}訳『愛すること』紀伊国屋書店、1959年、127頁。Erich Fromm. *The Art of Loving*, Harper & Row Publishers, New York, 1956.

- (13) D. コーエン、加藤健二訳『心と脳』河出書房新社、1998年、41頁。
David Cohen. *The Secret Language of the Mind*, Chronicle Books, San Francisco, 1996.
- (14) アップグナネッセイ『フロイト』144頁。
- (15) アンソニー・ストー『フロイト』88頁。
- (16) 小此木啓吾^{おこのぎけいご}『フロイト・その自我の軌跡』NHK放送出版会、1973年、137頁。
- (17) エーリッヒ・フロム『フロイトを超えて』147頁。
- (18) アンソニー・ストー『フロイト』89頁。
- (19) アンソニー・ストー『フロイト』89頁。
- (20) アンソニー・ストー『フロイト』187頁。
- (21) ラッシュェル・ベイカー『フロイト』194頁。
- (22) 小此木啓吾『エロスの人間論』講談社、1970年、107頁。
- (23) ピーター・ゲイ、入江良平訳『神なきユダヤ人』みすず書房、1992年、41-42頁。Peter Gay. *A Godless Jew*, Yale University Press, New Haven, 1987.
- (24) ピーター・ゲイ『神なきユダヤ人』51頁。
- (25) ピーター・ゲイ『神なきユダヤ人』49頁。
- (26) エーリッヒ・フロム、谷口隆之助^{たかのすけ}・早坂泰次郎^{たいじろう}訳『精神分析と宗教』、東京創元社、1953年、32頁。Erich Fromm. *Psychoanalysis and Religion*, Yale University Press, New Haven, 1950.
- (27) エーリッヒ・フロム『フロイトを超えて』49頁。
- (28) ドニ・ド・ルージュモン「愛」、『愛のメタモルフォーズ』平凡社、1987年、66-67頁。Denis de Rougemont, “Love”, *Dictionary of History of Ideas*, New Yorks Macmillan Publishing Com., 1973.
- (29) エーリッヒ・フロム『フロイトを超えて』149頁。
- (30) エーリッヒ・フロム、佐治守夫訳『フロイトの使命』みすず書房、1966年、169頁。Erich Fromm. *Sigmund Freud's Mission*, Harper & Row Publishers, New York, 1959.

Ⅲ フロイト左派

フロイトは精神分析によって、患者が無意識の中で恐れていた抑圧された記憶に立ち向かうようになれば、神経症は治ると考えていた。ところがフロイトの弟子たちの中から、それでは不十分であり、あらゆる抑圧を取り除いて、性のエネルギーを解放することによって神経症は治ると主張するフロイト左派が生じた。フロイトはそのような弟子たちの主張に不安を憶え、やがて彼らと袂を分かつようになった。

フロイトのリビドー理論を受け継いで、それを性欲理論として極めたのがライヒ(Wilhelm Reich, 1897-1957)であった。ライヒは、性的な抑圧を取り去り、性的な満足(オルガスム、orgasm)を得ることによって神経症は治ると考え、そのように指導することによって、患者を治療しようとした。やがて、自分こそはフロイトをフロイト以上に完成させる人間だと考えて、ライヒはオルガスムの教祖と化していった。

フロイトは、弟子ライヒのこのようなオルガスム理論に不安を覚え、ライヒに背を向けるようになった。しかし人間は本来、性的衝動に操られた動物的存在だと主張し

たのは当のフロイトであり、ライヒはフロイトの本来の主張に忠実に従ったままであった。

マルクーゼ (Herbert Marcuse, 1898-1979) も、ライヒと同様に、抑圧を取り除いてエロスを解放しようとした。フロイトによれば、エロスとは生の欲動 (Trieb、本能に相当する) であるが、その本質は性欲であった。つまりエロスを揺り動かす原動力がリビドーであった。マルクーゼは、エロスの開花した抑圧的でない文明を「エロスの文明」と呼び、その実現を目指した。

マルクス主義者は、人間 (労働者) は経済的に抑圧されることによって、本来の人間の姿を失っていると見たが、フロイト左派は、人間は性的に抑圧されることによって、本来の姿を失っていると見た。したがって、性を抑圧する規範は余計なものであり、排除すべきであった。そのような立場から、ライヒは「性器性欲にかけられている禁止を解く」ことによって神経症は治ると主張した。そしてマルクーゼは、ブルジョア・イデオロギーからエロスを解放し、エロスの文明を実現することを説いたのである。結局、フロイト左派によれば、規範とは野生の動物をつなぐ鉄の鎖、または無実の囚人をつなぐ足かせのようなものであって、それは「有害なもの、廃棄すべきもの」であった。それは正に倫理・道徳の破壊理論であった。

ポール・ロビンソン (Paul Robinson) はライヒ、ローハイム (Geza Roheim)、マルクーゼをフロイト左派と見なしており、彼らに共通した主張を次のように述べている。

ライヒ、ローハイム、マルクーゼ……かれらを性のラディカルとみなす理由は、性にたいする無限肯定、性のよろこびこそ人間的幸福の究極基準であるとする信念、近代文明の性抑圧にたいする公然たる敵意などのゆえである。……ライヒ、ローハイム、マルクーゼは、政治と性欲が相互に密接に関連性をもつとの確信を共有している。かれらのラディカリズムは、性の抑圧を政治支配の主要機制のひとつとみなす地点で成立している⁽¹⁾。

本論においては、ライヒとマルクーゼに焦点を当てて、統一思想の観点から彼らの思想を批判、克服する。

(一) ライヒ

1. ライヒの思想

① 性が人間の核心

性的なエネルギーが人間の核心であるというのがフロイトの原点であった。ライヒもそれをそのまま受け継いだのである。彼は『性と文化の革命』の中で、「人間の感情や思考の構造を支配しているのは性のエネルギーだ」、「心の構造の核心は性の構造であり、文化構造は本質的には性欲求によって支配される」、「生きていく幸福の核心は性の幸福だ」と書いている⁽²⁾。

ライヒはさらに、「性器的に健康な人びとだけが、自発的にしごとをすることと、自分たちの生活を非権威主義的に自ら決定することが、できる⁽³⁾」、「あたらしい世代の教育者、親たち、教師たち、政府のリーダーたち、経済学者たちは、まず、自分自身が性のうえで健康でなければならない⁽⁴⁾」と言って、性的に健康な人だけが、良く仕事ができ、リーダーとなる資格があるという。

② オルゴン・エネルギー

ライヒはフロイトのリビドー理論を唯物論の立場から推し進め、性のエネルギーを

物理的に発見できると考えた。そしてそれをオルゴン・エネルギー(Orgone energy)と呼び、その発見に晩年を捧げた。ポール・ロビンソンは次のように書いている。

生涯のおわりにさしかかってライヒは性エネルギーというフロイト流の仮説のみを、ひたすら「実証可能な」論理的帰結にまで追いこもうとしたのであった。この帰結こそ、フロイト派をも新フロイト派をもひとしく震撼させたリビドーの物理的実体の発見にほかならない。……リビドーとは電流であり、オルガスムとは壮大な電気あらしにほかならない。実験結果はもっともらしくこう総括されている。「人体は精巧な発電機にすぎない」⁽⁵⁾

1939年、ライヒはついにオルゴン・エネルギーを発見したと宣言した。そしてライヒの余生はこのエネルギーの特性調査と、内蔵する巨大な治癒力の開発にささげられたのであり、オルゴン・エネルギーはライヒのエラン・ヴィタル(*élan vital*)であった。1951年に至り、ライヒはオルゴン・エネルギーこそ、物理学の追求する宇宙の統一的な力であるという、誇大妄想的な理論を展開した。ポール・ロビンソンによれば、

最初は生命に特有なエネルギーと規定されていたのだが、1951年にはいっさいの实在がそれから発達する初発の要素であると再規定されている。物質もふたつのオルゴン・エネルギーの流れの性的抱擁ないしは交錯によって作りだされる。銀河系、北極光、ハリケーン、万有引力は、みないちようにオルゴン・エネルギーの変容形態とされた。要するに物理学の初学者が夢みがちな統一場の理論をはるかにうわまわる、けたたましい理論をライヒは提唱したわけである⁽⁶⁾。

ライヒによれば、全ては生命力のいとなみであり、宗教体験も、生命力の興奮であり、細胞の生電氣的な荷電に基づくものであった。ライヒはさらに、人類歴史はオルゴン・エネルギーが自己意識になる過程であると主張した。ところが自己意識は、人間から感性的・生物的自発性を剥奪してしまった。そして自己意識こそ不安の根源であるという⁽⁷⁾。ライヒは唯物論から出発したにもかかわらず、心理的な結論に達してしまった。

③性の解放

ライヒは性器性欲にかけられている禁止をとくのが治療目標だとの結論をつよく信奉していた。そしてライヒは、「治療目標たるオルガスム能力の回復のためには、既成の性格を改良し、心の深淵から心的エネルギーの解放を意図しなければならない⁽⁸⁾」と考えていた。

ライヒは『性と文化の革命』の中で、「快樂はわるいことではない、いいことだとみとめ、性について罪悪感をもたないことだ⁽⁹⁾」、「性の幸福をまったく、実際に、肯定する⁽¹⁰⁾」と、性欲の解放を主張した。

④ 神経症と非行

ライヒによれば、性の抑圧が青少年の神経症の原因であるという。彼は次のように主張している。

思春期の葛藤や、思春期の神経症のあらゆる現象は、ひとつのことから生じる。これは、青少年は15歳ぐらいで性的成熟に達する、つまり、性交をしようとする生理的な要求や、生殖する、あるいは子どもを産む能力を、感じるという事実と、性交に対して社会が要請する法的なわく組——つまり結婚——を経済上また心の

構造上つくりあげることができないという事実とのあいだの葛藤なのだ⁽¹¹⁾。

ライヒはさらに、性の抑圧が「必然的に、少年非行をおこすことになる⁽¹²⁾」という。そのようなライヒの主張は伝統的な道徳に真っ向から反するものであった。

⑤ 新しい道徳と性経済

ライヒによれば、「伝統的な道徳のイデオロギーは、権威主義の結婚制度をささえる基石だ。それは性の満足をもとめることと一致せず、性はよくないものだという態度を前提としている⁽¹³⁾」のであった。そして「われわれは標準というものをつくらない⁽¹⁴⁾」と、伝統的な道徳を否定した。

そしてライヒは、既存の道徳と闘い、新しい道徳、規律を求めていくという。それでは、新しい道徳とはいかなるものであろうか。それは性に対する抑圧のない自然な性の道徳であるという。

ライヒによれば、新しい性道徳は性経済を目的とするものである。ライヒのいう「性経済にしたがう規律のエッセンス」とは、「絶対的な規範とか戒律などいっさいもたず、生きていく意志と生活のなかのよろこびこそが社会生活を調整するものと認識することにある⁽¹⁵⁾」。

ライヒはさらに、新しい道徳においては、「おもいやりの性と官能の性が分離されていないこと」、「同性愛だろうと非性的なものだろうと、昇華されていないどんな性の奮闘も抑圧されていないこと」、「性と、生きるよろこびが、完全に肯定されていること」などと、性を謳歌する道徳を主張したのであった⁽¹⁶⁾。

ライヒは「一生、一夫一婦でくらししていける人には、そうさせよう。しかし、そうできない人、そうしたら、くさってしまう人は、自分の人生をちがったものに整理しなおす機会をもつべきだ⁽¹⁷⁾」、「男と女が同数の集団では、パートナーをかえる可能性は、よりおおきいのだ⁽¹⁸⁾」と言って、禁欲主義と一夫一婦制を否定した。

⑥ 家庭の否定

ライヒは家父長的な家族制度を権威主義的で、おしつけがましいとして攻撃する。権威主義的な家庭の原型は、父親、母親、子どもからなる三角形であり、そのような家庭が人間社会の中核となっているという⁽¹⁹⁾。そして「家父長的な家庭は、人びとを性的なかたわにすることによって、家庭自身を再生していく」のであり、「性の抑圧を、性的な障害や神経症や精神病や倒錯や性犯罪とともに、いつまでもつづかせる」というのである⁽²⁰⁾。

⑦ 母権制と原始の賛美

ポール・ロビンソンによれば、フロイトはジェームズ・フレイザー(James Frazer)のトーテミズム研究を土台にして、人類の起源にまつわる神話を解明した。これにたいしてライヒはヨハン・バッハオーフェン(Johan Bachofen)、ルイス・モーガン(Lewis Morgan)、フリードリッヒ・エンゲルス(Friedrich Engels)、ブロニスラフ・マリノフスキー(Bronislaw Malinowski)らの著作から母権制の検討をはじめた。彼らの著作にあらわれた研究成果によれば、「母権制はいかなる支配体制をも欠如した状態」であり、それは、「マルクスのいう原始共産制の時期に該当する」のであり、「母権制社会では青少年が性欲にかんして完全に自由」であったという⁽²¹⁾。

そのような立場から、ライヒは原始の母権制を民主主義的であり、性的に自由であったと賛美した。ところが父権制の発達とともに、禁欲主義のイデオロギーが発達したというのである。

⑧ 心の構造が歴史を変える

ライヒはマルクス主義者でありながら、心の構造が変わらなければ社会や歴史の発展はないと、唯物史観に反することを主張する。

ソビエトの性革命のもっとも基本的な部分は立法だ、ということをだれもが信じている。しかし、法律とかその他のどんな形式の変化も、ほんとうに「大衆にゆきわたる」ことがなければ、社会的な意義はない。つまり大衆の心の構造をかえないかぎりダメだ。こうしてはじめて、イデオロギーとかプログラムは、歴史をかえるような規模の革命勢力となれるのだ⁽²²⁾。

ライヒはさらに、心の構造が変わることによって、性も解放されるという。

人びとの心の構造がかわれば、彼らは、やさしく同時に官能的な、性器的な愛を、体験できるだろう。子どものときから、性を完全に体験できるだろう。つまり、オーガズムの能力を発揮できるだろう⁽²³⁾。

⑨ フロイト批判

フロイトは言語化や意識的な思考の働きによって、性欲を抑圧し、中性化し、人格化しようと考えたが、ライヒは抑圧されている性を否定するのではなく肯定せよと主張した。

ライヒによれば「フロイトのはじめの発見は、性を抑圧すべしうたがいてもなく、人びとは病気になるだけでなく、しごとをすることも、文化的な業績をあげることもできなくなる、ということをあきらかにしたものだ」。ところが「道徳や倫理がおびやかされたので、全世界がかつとなってフロイトに反対した」のであった⁽²⁴⁾。その結果、フロイトは性の解放に反対し、性を抑圧する方向——文化は本能を抑圧し拒否することによってなりたつ——に逆行してしまったと、ライヒはフロイトに反旗を翻すようになった。ライヒは「精神分析の科学的なしごととは形而上学へと墮落した⁽²⁵⁾」とフロイトを批判した。

ポール・ロビンソンはそのようなフロイトの二律背反に対して、その原因はフロイトに残っているユダヤ主義——性的謹厳をむねとし、一夫一婦制にたいする伝統的な墨守の気風——にあるという⁽²⁶⁾。

⑩ マルクス主義とフロイト主義

ライヒはマルクス主義者でもあった。そして彼は、マルクス主義の立場からも家庭の廃止を叫んでいる。ライヒは言う。

マルクスによれば、社会革命の主要な課題は、家族の廃止である。……ふるい家族は、未開社会のむかしの氏族とある類似をもった組織におきかえられはじめた⁽²⁷⁾。

ポール・ロビンソンが言うように、「社会主義運動と精神分析療法を並行しておこなうライヒの努力は、マルクスとフロイトの理論的統一をはかろうとする意図からでたもの⁽²⁸⁾」であり、ライヒは一夫一婦婚をなくすことによって、ブルジョア社会の基盤である家父長家族をなくすことができると考えていた。そしてライヒはソ連における性革命が「家族制度を根底からくずす⁽²⁹⁾」ことに期待をかけたのであった。

⑪ ソ連批判

レーニン革命の役割に関して、「共産主義は禁欲主義をもたらしてはならない。そうではなくて、みたまされた愛の生活をとおして、生命と活力の楽しみをもたらさなく

てはならない⁽³⁰⁾」と書いていた。つまり性の解放を主張していたとライヒは言う。ところがソ連では、後に本能的な愛情生活は「一杯の水」のようなものであるとして、本能的な愛を戒めるようになった。その結果、この「一杯の水理論」は、一部の青年たちの頭を、完全におかしくしてしまった⁽³¹⁾」という。

ライヒによれば、「レーニンははっきりしたプログラムは、示さなかった。彼はただ愛のない性行為を非難し、幸福な性のいとなみの方向をさしめしただけであった。……たしかに、レーニンは禁欲を主張したのではなかった!⁽³²⁾」ところが、「この一杯の水理論の部分が、くりかえし、くりかえし、おくびょうな人びとと道徳家によって、思春期の性に反対するたたかいにおいて、彼らの有害な考えをまもるのに利用された⁽³³⁾」というのであった。

その結果、「同志よ!……国家はまだまずしいので、あなた方を養ったり、子供たちの教育をしたりできない。だから、あなた方に対する忠告は、禁欲だ!⁽³⁴⁾」と言って、ソ連では禁欲を奨励するようになったと、ライヒはソ連を非難したのであった。

2. 統一思想から見たライヒ

①人間の核心

ライヒが「性が核心である」というのは、フロイトの観点を受け継いだものである。統一思想から見れば、人間の心の核心になっているのは心情(愛)であり、心情を中心として、生心(理性を含む)と肉心(性欲を含む)が主体と対象の関係で円満な授受作用をおこなうのが、人間の本来の姿である。しかるにフロイトとライヒは、生心の主管を受けるべき、肉心の性を主体であり、核心としたのである。すなわち、人間を性的人間、性的動物としてとらえたのである。

ライヒは性的に健康な人だけが、良く仕事ができ、リーダーになりうるという。しかしそうではない。愛でもって性をよく主管し、コントロールできる人が、そうなりうるのである。性的に活発だけでは性的動物と何ら変わらない。

②オルゴン・エネルギー

ライヒはリビドーを物理的エネルギーと考え、その発見に晩年を捧げた。しかし性的エネルギーは本能的なエネルギーであり、物質的なエネルギーではなかった。性相的な本能を物理的、定量的にとらえようとするところにライヒの誤りがあった。不老長寿の薬を探し求めた秦の始皇帝のように、ライヒは妄想に取りつかれてしまった。そして彼は、精神を病み、悲劇的な最後を遂げたのであった。

ライヒはオルゴン・エネルギーを追い求め、それを物理的に発見しようとしたが、それは無謀な試みであった。そうでなくて真の愛のエネルギーを追求すべきであった。真の愛は、物理的に、実験的に発見されるようなものではない。それは主体と対象が神の愛を核として、互いにために生きるときに現れてくるのである。

③性の解放

ライヒは、性を解放せよと叫んでいる。しかしそれは、フロイトが恐れたように、人間が野獣のような存在になるということである。人間は本来、生心が主体、肉心が対象であって、肉心(性的衝動)が生心(規範)に従う時、人間は本来の姿、愛の人間になるのである。

④ 神経症と非行

ライヒは、幼児期における性の抑圧が神経症の原因であるという。それは初期のフロイトの立場であった。しかし統一思想から見れば、神経症の原因は心情の傷であり、それは幼児期のみならず、先祖から連結されているのである。ライヒはまた、性の抑

圧が非行の原因であるというが、そうではない。性の解放、すなわち無軌道な性が非行の原因となっているのである。

⑤ 新しい道徳と性経済

絶対的な道徳、規律を認めないという点では、ライヒはフロイトの立場を相続していたのである。ところがフロイトが絶対的な道徳に代わって、各自の理性にしたがって、自律的な道徳を確立しようとしたのに対して、ライヒは性に関する規律を伴う一切の道徳を廃し、性を完全に肯定する新しい道徳を打ち立てようとした。結局、それは人間の道徳性、人格性を廃し、人間を野生の動物に貶めようというものであった。

ライヒはさらに、新しい性道徳において、「よりたかい精神的水準に性をたかめる」とか、「おもいやりの性と官能の性を分離しない」などと、主張している。しかしそれはライヒのいう新しい性道徳によっては実現不可能である。神のみ言に由来する絶対的、普遍的な規範に基づいた、真なる道徳によって、初めて実現しうるものである。

⑥ 家庭の否定

ライヒはマルクス主義の立場から、既存の家庭は階級支配と、性の抑圧の根拠地であるという。統一思想から見れば、家庭は真の愛の根拠地であり、理想社会の出発点である。

ライヒによれば、家庭の原型は父親、母親、子どもからなる三角形(逆三角形)であるが、そこには中心の核が欠けている。統一思想から見れば、家庭の原型は神(神の愛)を中心とした、父親、母親、子どもからなる四位基台である。

ライヒは、家庭は人々を性的なかたわにするというが、そうではない。家庭は性の秩序の場であり、真の愛の基台となるのである。真の愛に基づいた家庭を築かない人の性は無軌道で、かえって性的なかたわになりやすいのである。

⑦ 母権制と原始の賛美

ライヒは、エンゲルスがそうであるように、原始の母権制社会を抑圧のない、自由な理想社会であるという。統一思想から見れば、人類歴史の初めに創造理想社会という理想があった。それは人間始祖のアダム・エバが真の家庭を築くことによって実現するようになっていた。しかし彼らの墮落によって理想社会は実現しなかった。その理想社会は母権制ではなく、父母権制であり、共産主義ではなく、共生共栄共義の社会である。

⑧ 心の構造が歴史を変える

ライヒは心の構造が社会を変革すると言う。それは唯物史観を否定するものである。統一思想からみて、心の構造が社会を変革するということに異存はない。しかしライヒのいう心の構造とは、性を中心としたものである。そうではなくて、心の構造は心情(愛)を中心としたものである。

⑨ フロイト批判

フロイトの出発点は、性的抑圧、本能の抑圧が神経症の原因であるということであった。ところが後に、フロイトはエゴでもって、性的本能の宿るイドを抑圧することを主張した。人間を性的衝動にかられた野生の動物と見るならば、ライヒの主張するように、野生の動物を宗教の檻に入れたり、宗教的規範の鎖に繋ぐのではなく、野生のままに解放せよという主張が生まれるのは、自然のことである。フロイトによれば、われわれは、下半身は動物、上半身は人間であるが、ライヒにおいては下半身も上半身も動物なのである。統一思想から見れば、人間は動物ではない。下半身も上半身も

人間である。すなわち、愛と理性でもって本能的な肉心を主管するようになるとき、われわれは全き人間、愛的人間（心情的存在）となるのである。

⑩ マルクス主義とフロイト主義

マルクス主義は階級対立の社会理論であり、フロイト主義は心理的葛藤の心理学である。しかるにマルクス主義は階級対立をなくすのではなく、支配階級（資本家）を暴力的に打倒することによって、被支配階級（労働者）の代表と証する共産党による、独裁社会を招来するものであった。他方、フロイト主義は心の葛藤を解消しうる思想ではなく、人間をいつまでもイドとエゴが対立する矛盾的存在と見るのであった。そしてライヒは、イド（リビドー）をエゴから解放することによって心理的葛藤をなくそうとした。しかし、それはかえって、人間を動物的存在に貶めようとするものであった。

統一思想から見れば、社会は階級対立によって発展するのではなく、政府と国民、リーダーと部下、経営者と従業員などが、愛を中心として円満な授受作用を行うとき、発展するのである。そして人間の心も、生心と肉心が、愛を中心として円満な授受作用を行うとき、心は葛藤から解放され、平安であり、喜びに満たされるのである。

⑪ ソ連批判

マルクス主義は、本来、性の解放と家庭の廃止を主張していた。しかし、ソ連はその本来の立場から離れて、後に禁欲を奨励するようになったとライヒはソ連を批判した。ソ連は、性の解放し、家庭を廃止すれば、社会は崩壊し、共産党による独裁国家も揺らぐという現実を目覚めたのである。

(二) マルクーゼ

1. マルクーゼの思想

①性の抑圧と資本主義

マルクーゼにおいて、ライヒと同様、資本主義は性の抑圧の機構でもあった。ポール・ロビンソンによれば、

資本主義的機構では——とマルクーゼはいう——性愛は遊びの要素と自然さを剥奪されている。愛情は、一夫一婦制に忠実であれとのイデオロギーにより慎重に制限され、義務と習慣に歪小化されてしまった⁽³⁵⁾。

フロイトと同様、マルクーゼは原父の独裁により、人は性的快楽から締め出されたとみているが、マルクーゼによれば、その結果、人は労働の苦役へと向かわされたのであった。ポール・ロビンソンは次のように言う。

原父独裁のもっとも重要な意味は、息子たちが姉妹や母親に接近するのを排除したことだとみる点で、フロイトとマルクーゼは一致する。この性的孤立の経済的帰結は、息子たちを原始ホルド内での労働の苦役にむすびつける。性的快楽からしめだされた結果、かれらの本能エネルギーは快楽をとまなわなければならない活動にむけて「発散」される。こうして性抑圧の問題が経済的従属——それゆえ資本主義の発生——にむすびつけられる⁽³⁶⁾。

マルクーゼによれば、労働は苦痛であり、快楽原則（快感原則）の否定であり、労働

の王国、すなわち必然の王国は、不自由の王国であった。したがって、性的快楽を解放すれば、資本主義は労働の価値を失わせられ、崩壊せざるを得ないのである。ポール・ロビンソンは、「あらゆる快楽の増大が、資本主義機構を継続してはたらかせるのに必要な規律と統制を破滅の淵にまで追いこむであろう⁽³⁷⁾」と、マルクーゼの立場を解説している。

マルクーゼは、労働と性欲の対立を解消しうる新しい秩序、新しい労働を実現すべきであると主張する。それは、多様なエロティシズムの復活をともなう労働である。そして「労働を快楽に変形することは、フーリエの偉大な社会主義ユートピアの中心的な観念であった⁽³⁸⁾」と、フーリエを賛美している。

②エロスとタナトス

マルクーゼはフロイトの提示したエロスとタナトスの闘争をマルクーゼ流に解釈した。フロイトは、エロスを人と人を結びつける友好的なものとして、性よりも愛に重きを置いたようであったが、マルクーゼはエロスを徹底的に性的なもの、リビドーに等しいものと見た。そして死の本能であるタナトスを労働に置き換えて、労働に対するリビドーの勝利が、タナトスに対するエロスの勝利であると見ている。ポール・ロビンソンはマルクーゼの主張を次のように説明している。

オートメーションがいつさいの労働の代役をはたす時代がやってくるだろうというものである。経済装置が完全に自力で回転するようになれば、近代資本主義の台頭に同伴した性抑圧のようないかなる技術上の必要性も不要になる。人間の肉体はふたたび労働の道具から快楽の道具に復帰する。肉体の再性化は、人類のリビドー・エネルギーをよみがえらせ、タナトスにたいするエロスの究極の勝利を約束するであろう⁽³⁹⁾。

ポール・ロビンソンによれば、マルクーゼの主張は、「文明の進行にともなってリビドー・エネルギーと破壊エネルギーの間には一定量の相互作用がある。……破壊エネルギーはリビドー・エネルギーの後退によって生じた‘空間’にだけ出現する。……性欲が自由にはたらいっているばあいだけに——破壊性は極限まで抑制される⁽⁴⁰⁾」のであり、「マルクーゼは、このリビドー経済を‘文明の弁証法’と名づけた。遂行原則（実行原則）の支配下で成立する現代文明が事実上、エロスを窒息させているのを論証するのが、『エロスと文明』の核心となっている⁽⁴¹⁾」のである。

③非抑圧的文明としてのエロス文明

フロイトは性欲を抑圧することによって文化が発達したと主張したが、マルクーゼはそのようなフロイトの見解に反して、文化のエネルギーは性欲から来るとして、非抑圧文明であるエロス文明の到来を宣言した。フロイトの文明は昇華の文明であるが、それはエロスを弱めるものであって、「エロスを弱めることで、破壊的な衝動を解放する。……文明は、自己破壊にむかっていく⁽⁴²⁾」と言う。

マルクーゼによれば、文化は、「その必要とする心的エネルギーの大部分を、性欲からもってくる⁽⁴³⁾」のであり、われわれはまず、「本能の抑圧——社会的に有用な労働——文明」としたフロイトの相関関係を、「本能の解放——社会的に有用な仕事——文明」の相関関係という意味に変えられることをしめさなければならないと言う⁽⁴⁴⁾。

ポール・ロビンソンによれば、マルクーゼはフロイトによる文明と抑圧の等式が未完成であると断定した。そしてフロイト思想にふくまれた批判的傾向を、この傾向の悲観的・非歴史的な足枷せから解放して、フロイトを、非抑圧的文明の到来を告知する 20 世紀の偉大な予言者の地位に就任させようとしたのであった⁽⁴⁵⁾。それと同時に、マルクーゼ自身はアメリカのヒッピー文化の中で、あたかもメシヤのようにあがめら

れるようになったのである。

④過剰抑圧

マルクーゼは過剰抑圧(surplus repression)という概念を提示した。「過剰抑圧」とは、マルクーゼによれば、社会支配の特殊な形式を保持すべきときにはどうしても必要な一連の制限を意味する。マルクーゼは次のように説明している。

前述のように、現在ひろく行なわれている本能の抑圧は、労働の必要から生じたというより、むしろ、支配の利益を守るために押しつけられた、ある特定の労働の社会組織から生じたのであり、抑圧は大部分、過剰抑圧である⁽⁴⁶⁾。

マルクーゼのいう過剰抑圧はマルクスの剰余価値(surplus value)にちなんだものであった。ポール・ロビンソンによれば：

過剰抑圧はマルクスの剰余価値——すなわち資本主義のもとでの人間搾取の量的な尺度——との同一視のふくみがあったのはあきらかである。……文明の特殊・歴史的形態においては大量の性抑圧が必然的に作りだされるというのがマルクーゼの見解である。じっさい近代文明における性抑圧の大部分は過剰抑圧であり、支配に奉仕する抑圧である⁽⁴⁷⁾。

⑤フリーセックスと家庭の崩壊

マルクーゼは性欲が性器に集中する以前の多様な性欲の復活を叫ぶ。

肉体は、もはや労働のためフルタイムに使われる道具ではなくなり、再性化されるだろう。リビドーのこの拡大にふくまれる退行の結果、まず、すべての性感帯が復活し、ついで、性器以前の多様な性欲が復活して、性器の優位が失われる。肉体の全部が、性的定着の対象となり、享受されるもの、快楽の手段になるだろう⁽⁴⁸⁾。

アラスデア・マッキンタイアー(Alasdair MacIntyre)が言うように、「マルクーゼは、性的リビドーをただ生殖器および一夫一婦制という通路にだけ放出させることを過剰抑圧の過程であると見た⁽⁴⁹⁾」のであり、マルクーゼは、リビドーを解放することにより、一夫一婦制と夫権の家族制度を崩壊せしめようとしたのであった。

⑥西洋哲学への批判

マルクーゼは理性中心の西洋哲学は支配のロゴスに基づいているが、「そのロゴスは、理性に命令し、支配し、方向づけるロゴスであり、人間と自然はそれに服従しなければならない⁽⁵⁰⁾」と言う。ところが「ヘーゲルの後、西欧哲学の主流は涸れてしまっている。支配のロゴスは、その体系を建ててしまい、それにつづくものはエピローグである⁽⁵¹⁾」と、理性中心の西洋哲学は終焉に近づいていると言う。

マルクーゼはさらに、感性与理性の関係について、「感覚、快楽、衝動の領域に属しているものには、理性に敵対するもの、鎮圧され、束縛されるべきものの意味がふくまれている⁽⁵²⁾」、「理性という法廷のまえでは、美の法則は有罪とされる⁽⁵³⁾」と述べて、感性的なものは、理性によって鎮圧されてきたという。

マルクーゼによれば、文化が救済されるには、当然、理性中心の文明が感性の上に課してきた抑圧的なコントロールの廃棄が必要になる。マルクスは資本家を打倒し、労働者を解放しようとしたが、マルクーゼは抑圧的な理性と戦って、感性を解放しようとしたのである。マルクーゼは言う。

文明の病は、……感性を抑圧して、理性による専制を確立しようとしたために生じたのであると、彼〔シラー〕は診断した。したがって、葛藤の状態にある、これらの衝動を和解するには、理性の専制を排除し、感性の権利を回復しなければならないだろう⁽⁵⁴⁾。

そしてマルクーゼは、抑圧的でない文化、本能の自由と理性の秩序が調和した文化、シラー(Friedrich Schiller)のいう「美の王国」(aesthetic state)を理想として掲げる。

われわれは、神話と哲学のなかで片隅におしやられていた、抑圧的でない文化の観念をひろいあげたが、それは本能と理性の新しい関係をめざすものである。文明化された道徳は、本能の自由と秩序とを調和させることによって、逆転される。抑圧的な理性の専制から解放されて、本能は自由で永続する存在の關係にむかう、ひとつの新しい現実原則を生み出す。シラーの「美の王国」という観念、つまり抑圧的でない文化の観念は、成熟した文明のレベルで具体化される⁽⁵⁵⁾。

マルクーゼは、「ほんとうに自由な文明では、すべての法則を、個人が自分に課するものである」、「自由によって自由を与えることは美の王国の普遍的な法である」という⁽⁵⁶⁾。すべての法則は、「個人が自分に課する法則」であるというが、それは絶対的な規範を否定し、規範を自己決定するということである。

⑦フロイトへの批判

マルクーゼはフロイトの原父神話にたいして、「それを科学的に立証することはもとより、論理的に一貫して筋を通すことさえ、あきらかに困難であり、その困難を乗り越えることは、できないだろう⁽⁵⁷⁾」、そして「もし、フロイトの仮説が、人類学のデータで確認されないとすれば、いさぎよく捨ててしまうほかはない⁽⁵⁸⁾」と原父神話を否定した。「ただし、それが一連の破局的な出来事を通じて、……これまで説明できなかった文明のさまざまな様相をあきらかにした、ということだけはみとめられる⁽⁵⁹⁾」として、原父神話が近親相姦を禁じた意義は認められるというのであった。

フロイトは、性欲は危険なものであって、性欲を抑圧することで、文化が発達したと主張しているが、エロスに対しては、人と人を結びつける力であるという。フロイトにおいて、エロスの本質は性欲であるのに、なぜそのようなことが言えるのかと、マルクーゼは疑問を提示する。

しかし、このように、性欲を、文明と「葛藤」する本質的に爆発的な力、と解釈することから、どうして、エロスを、「より大きな単位に生体を結びつける」努力、「より大きな単位を確立し、それを維持する、手短かにいえば、結びつける」努力として定義することが正当化されるのだろうか⁽⁶⁰⁾。

結局フロイトは、「性欲は、人間の自由と幸福を生む源泉である⁽⁶¹⁾」と主張して、西欧文明のもっとも決定的な断罪であると同時に、「文明の発達性は性の抑圧によってなされる」と主張して、西欧文明のもっとも強力な擁護にもなっていると、マルクーゼはフロイトを批判した。それに対して、マルクーゼは抑圧されざる性欲によって文明は発達すると主張したのである。

⑧革命的反抗、ヒッピー文化の奨励

マルクーゼは、性の抑圧機関である資本主義を打倒して、性の解放されたエロス文

明、美の王国の樹立を目指した。その革命を担う勢力は誰か。マルクーゼは、「アメリカの学生運動、アメリカの大都市のスラム街に住む黒人たち、中国の文化大革命、ベトナムの民族解放戦線、それにキューバ」に期待を寄せた⁽⁶²⁾。なかでも彼は、反抗的な学生たちに特別な期待を寄せた。アラスデア・マッキンタイアーによれば、

マルクーゼは解放勢力についての彼のテーゼの大部分を学生の反抗の性格についての調査にささげている。彼が学生の反抗を真正の解放の主体とみなしたのは、とりわけこの反抗の美的性質やそのスタイルのせいである。花運動、いわゆるヒッピー文化の言語、魂の文化の言語、四文字の使用などは、マルクーゼが主張するところによれば、市場文化と衝突する新しい感受性をあらわしている⁽⁶³⁾。

彼ら、学生たちは「将来の解放者のエリート」であり、受動的な大多数の人びとを解放する能動的な少数者であると、マルクーゼは檄を飛ばしたのであった。

⑨快感原則、現実原則、実行原則

マルクーゼはフロイトの現実原則 (reality principle) に関連して、実行原則 (performance principle) という原則を提示する。実行原則とは、西洋文明の進歩を支配してきた特定の現実原則であるという。

ここまでいろいろと分析を進めてきたが、それは、文明の本能機構のなかにある、基本的な、いくつかの傾向をとらえ、特に、西欧文明の進歩を支配してきた、特定の現実原則をあきらかにするためであった。われわれは、この現実原則を実行原則と名づけ、社会にひろく行われている労働の組織から生まれた支配と疎外が、この現実原則を通じて、本能に課せられるさまざまな要求を大きく左右したという事実を、しめそうとした⁽⁶⁴⁾。

そして実行原則のもとで、自由の究極的なかたち、つまり不安なく生きることは、「政治理論や哲学など、もっと現実的な学問では、ほとんどいつも、ユートピアとして貶された。現実のなかにひそむさまざまな可能性を、ユートピアの無人島へ追いやること自体が、実行原則のイデオロギーがもつ本質的な要素である⁽⁶⁵⁾」という。すなわち、実行原則の下で、エロス文明の可能性は退けられたと言う。

マルクーゼは、「エロスは、現実原則が代表するすべてのものにたいして、最初のたたかいを挑む。それは、父、支配、昇華、あきらめにたいするたたかいである⁽⁶⁶⁾」と言い、エロスは現実原則・実行原則を超えていくという。そして、「成熟した文明では、……快感原則と現実原則の敵対的な関係は、快感原則にとって有利なように変えられるだろう。そうしてエロス、つまり生の本能は、かつてみられなかったほど、解放されるだろう⁽⁶⁷⁾」という。

⑩キリスト教道徳に対する批判

マルクーゼは、「キリスト教的道徳の勝利とともに、生の本能は倒錯し、圧迫された。やましい心は、神にたいする罪と結びついた」のであり、「人間の本能のなかには、『支配者』であり、『父』であり、最初の祖先、世界の初めである者にたいする敵意、反逆、暴動が植えつけられた」。そしてその反逆を鎮圧するために、「[キリスト教道徳による] 抑圧と剥奪は、このようにして正当化され、肯定された」と言う⁽⁶⁸⁾。

そして、キリスト教道徳をくつがえし、エロス文明を樹立するために、マルクーゼは Heinrich von Kleist の言葉、「われわれは、罪のない状態にたちもどるためには、もう一度知恵の木の実を食べなければならない」を引用しながら、「『原罪』はふたた

びおかされねばならない」と主張したのである⁽⁶⁹⁾。

かくしてマルクーゼは、「真の文明は……ガスのなかにも、水蒸気のなかにも、回転
卓子のなかにもない。それは原罪の傷痕がうすくなることにある⁽⁷⁰⁾」と、キリスト教
のいう原罪の記憶を、人類の頭から根絶しようとしたのである。

⑪ギリシア神話

マルクーゼによれば、ギリシア神話のオルフェウス (Orpheus) とナルキソス (Narcissus) というイメージは、エロスとタナトスを和解させ、エロスを解放するものであるという。

彼らは、支配もコントロールも受けずに、解放されている世界の体験を思い出させる。そのような世界は、自由の世界であり、そこでは、抑圧されて硬化した、人間と自然のさまざまなかたちにしばられていたエロスが解放されて、その力を発揮するのである。エロスの力は、破壊的ではなく、平和であり、恐怖をおこさせるものではなく、美をよびおこす。その力がはたらく秩序を明らかにするには、ただいくつかの組みあわされたイメージを数えあげるだけで十分であろう。快樂の償い、時間の停止、死の吸収、沈黙、眠り、夜、楽園、つまり、ニルヴァーナ原則は、死としてでなく生としてある⁽⁷¹⁾。

マルクーゼはさらに、オルフェウスの、ナルキソス的な世界の体験は、実行原則の世界を維持するものを否定し、世界は美にむかうという。

オルフェウスとナルキソスのエロスでは、この傾向が自由に放出され、自然の事柄は、あるがままの姿で存在できるようになる。しかし、それらの事柄があるがままの姿でいるためには、エロスの態度に従わなければならないし、またその態度のなかでのみ、エロスを受けとることができる。オルフェウスの歌は、動物の世界を平和にし、ライオンを仔羊や人間と仲良くさせる。自然の世界は、人間の世界のように、圧迫と残虐と苦痛の世界であり、人間の世界と同様、解放されるのを待っている。この解放がエロスの仕事なのである。オルフェウスの歌は、石のように硬ばった動植物の心をうち破り、森や岩を感動させる。——そうしてそれらを喜悅へと誘う⁽⁷²⁾。

マルクーゼはオルフェウスとナルキソスの世界を、自由の世界、エロスの解放、ニルヴァーナとして賛美する。すなわちマルクーゼは、フロイトのいう抑圧による文明とは対照的なものとして、オルフェウス、ナルキソス的な世界を賛美するのである。

われわれは想像力のいくつかの原型、つまり、抑圧による生産性をあらわしている文化の英雄 [フロイト] たちと対照をつくる、創造的な享受性を象徴化した原型をよびおこした。……オルフェウス・ナルキソス的なイメージの代表している内容は、秩序が美であり、仕事が遊びであるような美的な態度で、人間と自然をエロ的に和解 (結合) することであると、われわれは考えた⁽⁷³⁾。

オルフェウスとナルキソスの世界は、完全なエロスを求めるために、正常なエロスを斥け、秩序を否定する。オルフェウスは、同性愛の始まりとも結び付けられている。

この古典的な伝説で、オルフェウスの名は、同性愛の始まりと結びつけられている。彼は、……より完全なエロスを求めるために、正常なエロスを斥ける。ナルキソスのように、彼も生殖的な性欲の抑圧的な秩序に抗議する。オルフェウスと

ナルキソスのエロスは、けっきょく、この秩序の否定、つまり、偉大なる拒否である⁽⁷⁴⁾。

マルクーゼは『エロスの文明』の中で、「肉体的な愛にはじまって、ひとりの対象からつぎの対象へと、エロスの充足は上昇をつづけ、……高次の文化への道は、少年の真の愛情を通して、開けている。……エロスの文化をつくる力は、非抑圧的な昇華である⁽⁷⁵⁾」という。つまり、肉体的な愛、移りゆく愛、同性愛を通じながら、エロスが上昇し、非抑圧的なエロス文明が実現されるというのである。

2. 統一思想から見たマルクーゼ

マルクーゼの主張には、悪霊的な響きがある。アラスデア・マッキンタイアーは次のように言う。

マルクーゼの主張は雲をつかむようである。……彼の教説の効果は呪文的、かつ非合理的であり、哲学的というより魔術のことばを用いているようである。……すなわち思想よりも刺激をよび起す大げさな言語のなかに記述された見せびらかしの秘薬を求める趣向がある。こうした言語の墮落にマルクーゼの散文は多大に寄与している⁽⁷⁶⁾。

①性の抑圧と資本主義

ポール・ロビンソンは、マルクーゼのスローガンは「愛しあい、戦争をなくそう」であると言う。

「政治的序文」は、かつて『エロスと文明』の主調音だった政治的エネルギーと性エネルギーの総合という、風がわりで両面的な見解をくりかえすことで沸点にたっている。エロスの次元と政治の次元の結節点をどうかんがえたらよいだろうか。……愛しあい、戦争をなくそう⁽⁷⁷⁾。

マルクーゼのいう「愛しあおう」とは、性的に愛し合おうということであり、それはフリーセックスの奨励であった。「戦争をなくそう」という反戦の叫びは、自由主義陣営の武力行使をやめさせ、共産主義陣営の勝利に加担しようというものであった。それはサタン側のカインが神側のアベルを支配することを目指すものであった。結局、家庭を破壊し、世界を支配しようとするサタン(悪魔)のはたらきが、マルクーゼの背後にあったのである。

②エロスとタナトス

マルクーゼはエロスを徹底的に性的なもの、タナトスを労働の苦役とみなした。しかし労働が苦役であったのは、奴隷社会、封建社会、そして初期の資本主義社会のような強権社会においてなされたことであり、本然の社会においては、労働は喜びとなるのである。

統一思想から見れば、労働は本来、創造性の発揮による万物主管であり、神から与えられた三大祝福のなかの第三祝福である。第一祝福は人格陶冶による個性完成、第二祝福は夫婦の愛を中心とした家庭完成、そして第三祝福は創造性の発揮による万物主管である。第二祝福に属する性愛と第三祝福に属する労働は対立するものではない。したがって、エロスと労働を敵対的なものと見るのは間違っている。

③非抑圧的文明としてのエロス文明

マルクーゼのいうエロス文明とは、フリーセックスのヒッピーの文化であり、ひいては性的倒錯のソドム・ゴモラの文化でしかない。フロイトが言うように、文化は性を抑圧して築かれるのではなく、マルクーゼが言うように、性を解放して築かれるものでもない。統一思想から見ると、真の愛とロゴス(規範)に導かれるとき、心情文化(愛の文化)が築かれるのである。そのとき、性は聖なるものになるのであり、フロイトのいうような、野蛮な衝動としてのイド(リビドー)ではなくなるのである。しかしながら、今日までの墮落した世界における文化には、フロイト流の理性中心の抑圧的な文化や、マルクーゼ流のソドム・ゴモラの文化も、色濃く存在していたのである。

④過剰抑圧

マルクーゼのいう過剰抑圧は、マルクスのいう剰余価値にちなんだものであった。ところでマルクスのいう剰余価値とは、資本家が労働者から搾取していることを告発し、革命を合理化しようとして捏造した架空の概念であり、恣意的なものであった。同様に、マルクーゼのいう過剰抑圧も、性的抑圧を告発し、性の解放を合理化しようとして造り上げた恣意的な概念にすぎないのである。

⑤フリーセックスと家庭の崩壊

マルクーゼは、あきらかに性解放の理論家であったが、彼は「現代アメリカ生活のめだつた特徴のひとつとなった、性の氾濫の擁護者として誤解されるのを警戒していた」のであり、「現実の性の氾濫に直面させられると‘それはわたしの意見の全部ではない’とってしりぞけてしまう」というのであった⁽⁷²⁾。マルクーゼはまさに自分の言動に責任を持たない、責任のがれの二枚舌の論者である。

⑥西洋哲学への批判

マルクーゼは、本能の自由と理性の秩序が調和した、非抑圧的な文化を理想として掲げながら、一方で、理性を退けて、感性を解放しようとしている。統一思想の観点から言えば、理性を退けるのではなくて、理性の示す規範に従いながら感性を發揮すべきである。

⑦フロイトへの批判

フロイトは本来、キリスト教封建道徳が性欲を抑圧するところから神経症が生じると主張していた。ところが後に、エゴでもって性欲を抑圧せよと言い、文化は性欲を抑圧するところから生まれると言う。さらにエロスの本質は性欲(リビドー)——野蛮な排斥的な衝動——であると言いながら、エロスによって人と人を結びつけるという。マルクーゼは、ライヒと同様に、そのようなフロイトの矛盾性を指摘したのであった。

フロイトは、下半身は生理的な唯物論で上半身は観念論であったが、マルクーゼは、ライヒ同様、全身が唯物論者であった。統一思想から言えば、人間は心情(愛)を中心とした全き人間、すなわち愛的人間(心情的存在)となるべきである。

⑧革命的反抗、ヒッピー文化の奨励

マルクーゼは「将来の文化のエリート」として、反抗的な学生たち、スラム街の黒人たち、中国の文化大革命、ベトナム解放戦線等に期待をかけた。しかし、収容所列島であった共産主義社会の実態、文化大革命の大惨事、ベトナムのボートピープル等が示すように、マルクーゼが期待をかけた革命はみな悲劇に終わったのである。共産主義は、プロレタリアートの天国を目指しながらプロレタリアートの代表と称する共

産党の独裁に終わったように、マルクーゼの主張するエロスの理想社会も結局、彼のような悪霊的な人物が支配する独裁社会に至らざるを得ない。

それに対して統一思想の目指す世界は、すべての人類を子女のように愛する、真の父母の愛による人類一大家族世界、すなわち「神の下での一大家族」の世界である。

⑨快感原則、現実原則、実行原則

マルクーゼは快感原則に対する、現実原則とさらにその特殊形態である実行原則について語り、快感原則に従うエロスによって現実原則と実行原則を超えなくてはならないと主張する。それは規範を廃してエロスを解放せよということである。結局、フリーセックスの奨励である。統一思想から見れば、自由(解放)は規範(原理、原則)を守ることによって得られるのであり、そこから真の愛も生まれてくるのである。従って自由をその性格とする快感原則と、規範を伴う現実原則(実行原則)は一つにならなくてはならないのである。

⑩キリスト教道徳に対する批判

原罪を再び犯せとか、もう一度知恵の木の実を食べよというのは、墮落した天使長である悪魔(サタン)のささやき以外のなにものでもない。

⑪ギリシア神話

オルフェウスとナルキソスの神話は、完全なるエロスの理想として描かれている。それは神の言(戒め、ロゴス)に反抗して墮落した天使たちが、人間を誘なおうとして、自分たちの世界を美化しようとして造り上げたものといえよう。マルクーゼは、そのような神話を源流としていたのである。

注

- (1) ポール・ロビンソン、平田武靖訳『フロイト左派』せりか書房、1983年、15-16頁。
Paul Robinson. *The Freudian Left*, Cornell University Press, New York, 1990.
- (2) ウィルヘルム・ライヒ、中尾ハジメ訳『性と文化の革命』勁草書房、1969年、xi-xiv。
Wilhelm Reich. *The Sexual Revolution*, Pocket Books, New York, 1975.
- (3) ウィルヘルム・ライヒ『性と文化の革命』247頁。
- (4) 同上、273頁。
- (5) ポール・ロビンソン『フロイト左派』69-72頁。
- (6) 同上、75頁。
- (7) 同上、78-79頁。
- (8) 同上、37頁。
- (9) ウィルヘルム・ライヒ『性と文化の革命』6頁。
- (10) 同上、245頁。
- (11) 同上、87頁。
- (12) 同上、269頁。
- (13) 同上、42頁。
- (14) 同上、131頁。
- (15) 同上、30頁。
- (16) 同上、132頁。
- (17) 同上、32頁。
- (18) 同上、245頁。
- (19) 同上、78頁。
- (20) 同上、86頁。

- (21) ポール・ロビンソン『フロイト左派』60頁。
- (22) ウィルヘルム・ライヒ『性と文化の革命』179頁。
- (23) 同上、246頁。
- (24) 同上、13-14頁。
- (25) 同上、10頁。
- (26) ポール・ロビンソン『フロイト左派』41頁。
- (27) ウィルヘルム・ライヒ『性と文化の革命』172頁。
- (28) ポール・ロビンソン『フロイト左派』49頁。
- (29) ウィルヘルム・ライヒ『性と文化の革命』167頁。
- (30) 同上、198頁。
- (31) 同上、199頁。
- (32) 同上、200頁。
- (33) 同上。
- (34) 同上、201頁。
- (35) ポール・ロビンソン『フロイト左派』192頁。
- (36) 同上、211頁。
- (37) 同上、193頁。
- (38) ハーバート・マルクーゼ、南 博訳『エロスの文明』紀伊国屋書店、1958年、196頁。Herbert Marcuse. *Eros and Civilization*, Beacon Press, London, 1966.
- (39) ポール・ロビンソン『フロイト左派』218頁。
- (40) 同上、215頁。
- (41) 同上。
- (42) ハーバート・マルクーゼ『エロスの文明』73頁。
- (43) 同上、『エロスの文明』72頁。
- (44) 同上、『エロスの文明』140頁。
- (45) ポール・ロビンソン『フロイト左派』219頁。
- (46) ハーバート・マルクーゼ『エロスの文明』140頁。
- (47) ポール・ロビンソン『フロイト左派』206頁。
- (48) ハーバート・マルクーゼ『エロスの文明』182頁。
- (49) アラスデア・マッキンタイアー、^{かなもりまさや}金森誠也訳『マルクーゼ』新潮社、1971年、67頁。Alasdair MacIntyre. *Marcuse*, Fontana/Collins, 1970.
- (50) ハーバート・マルクーゼ『エロスの文明』112-113頁。
- (51) 同上、105頁。
- (52) 同上、144頁。
- (53) 同上、157頁。
- (54) 同上、173頁。
- (55) 同上、179頁。
- (56) 同上、174頁。
- (57) 同上、50頁。
- (58) 同上、51頁。
- (59) 同上。
- (60) 同上、36頁。
- (61) 同上、244頁。
- (62) アラスデア・マッキンタイアー『マルクーゼ』132-33頁。
- (63) 同上、133-34頁。
- (64) ハーバート・マルクーゼ『エロスの文明』117頁。
- (65) 同上、136頁。
- (66) 同上、246頁。

- (67) 同上、139 頁。
- (68) 同上、106 頁。
- (69) 同上、180 頁。
- (70) 同上、139 頁。
- (71) 同上、149 頁。
- (72) 同上、151 頁。
- (73) 同上、160 頁。
- (74) 同上、156 頁。
- (75) 同上、191 頁。
- (76) アラスデア・マッキンタイアー『マルクーゼ』129 頁。
- (77) ポール・ロビンソン『フロイト左派』244-245 頁。
- (78) 同上、240 頁。